

額田部氏の系譜と職掌

仁藤敦史

Genealogy and Shokushou of the Nukatabe Clan

はじめに

① 平群郡の成立過程

② 額田部氏の系譜と職掌

③ 『条里図』作成の契機と年代
おわりに

【論文要旨】

本稿では「額田寺伽藍並条里図」の作成年代および作成目的を子細に検討するための基礎作業として、平群郡の成立過程や氏族の分布の考察を前提に、額田部氏の系譜と職掌を分析した。

結論としては①大和国では、県や国造国からの立郡（評）または分割が一般的であったが、例外的なのは忍海・広瀬・平群（飽波）の三郡である。三者に共通するのは、王宮を中心に独自の領域を構成している点である。奴婢や渡来系技術者の居住と密接な関係があり、有力豪族の拠点に対する倭王権の支配拠点・直轄地的な役割を果たしていた。②平群郡の領域のうち、後に額田・飽波郷となる地域は、独立した地域として評制下において複雑な変遷をする。大宝令以前には、人間集団の把握に対応して、後の額田郷域の北部は所布（または添上）評、東南部（大和川と佐保川および下つ道に挟まれた地域）は山辺評として把握されたと考えられる。さらに、額田邑の熟皮集

団については、「宮郡狛人」の宮郡を飽波評に比定することが可能ならば、領域的には他評（山辺評）に属する人間集団を飛び地的に支配していたことが想定される。③天武朝以前には大和・河内を中心にした天津彦根命系と山城・摂津を中心にした明日名門系という二つの系統の額田部連氏が存在した。このうち天津彦根命系の系統が推古朝には有力であったが、孝徳朝の蘇我倉山田石川麻呂事件により天津彦根命系の額田部連は一時勢力を失い、天武十三年（六八四）に宿禰に改姓した額田部連は明日名門命系と推定される。④額田寺の絵図が作成される年代と契機について、背景には額田部氏の二つの系統のねじれが背景にあり、これを解消した天平宝字二年（七五八）における額田部宿禰三当の改姓および同五年の法華寺への京南田の施入時あるいは、神護景雲元年（七六七）の称徳天皇の飽波宮への行幸時の可能性があり、いずれも造籍年や班田年に相当することを指摘した。

はじめに

「額田寺伽藍並条里図」は奈良時代の荘園図で、大和国平群郡額田郷を本拠とした古代の豪族額田部氏の氏寺である額田寺の伽藍および寺領を麻布（調布）に彩色で描いたものである。絵図の右上、九条三里二十六坪には「船墓額田部宿禰先祖」という注記があり、額田寺が額田部氏の氏寺であったとする推定を裏付けている。官営の東大寺とは異なる畿内の中級貴族の氏寺とその寺領の様子が描かれていることが大きな特色とされている。本図は額田寺の後身である額安寺（現在の奈良県大和郡山市額田部寺町）に長く伝来し、戦後は奈良国立博物館に寄託された後に、国の所有になった（現国立歴史民俗博物館蔵）。

額田部氏は、その本拠地が大和国を流れる諸河川の合流点という交通上の要地に位置したため水運を掌握し、また馬の飼育にも関係したことから、しばしば外国使節の接待役に任命された。また推古天皇（額田部皇女）など王子女の養育を担当したといわれる。鎌倉時代の『聖徳太子伝私記』によれば額田寺は、聖徳太子（厩戸皇子）がその晩年に田村皇子に譲った熊凝精舎の後身であるとも伝承される。

本稿は「額田寺伽藍並条里図」の作成年代および作成目的を子細に検討するための基礎作業として、平群郡の成立過程や氏族の分布を前提に、額田部氏の系譜と職掌を考察することを目的とする。

① 平群郡の成立過程

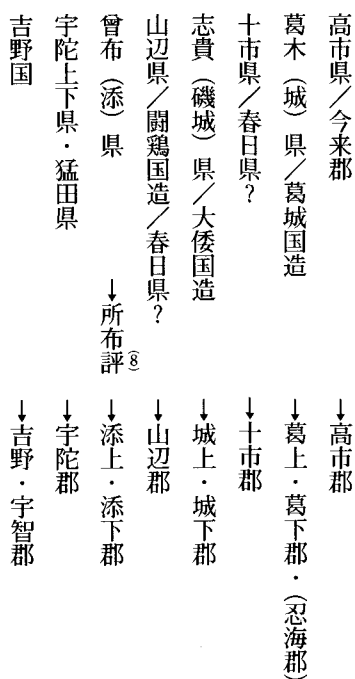
まず、平群郡の成立過程について検討する。『延喜式』民部上の国郡表の記載によれば、律令制下の大和国には以下に示すように十五の郡が存在した。

大和太管 添上 添下 平群 広瀬 葛上 葛下 忍海 宇智
吉野 宇陀 城上 城下 山辺 十市 高市

『延喜式』神名上にも記載の順番が一部異なる以外は同じ郡名が列記されている。^① 基本的にこれらの郡は、『日本書紀』大化元年八月条にみえる「倭国六県」、具体的には『延喜式』祈年祭祀詞に「高市・葛木・十市・志貴・山辺・曾布」とある「六御県」を継承または分割して立郡されたものと考えられる。^② 六県以外にも「春日県」がみえ、一般的には後の添上郡春日郷を中心とした地域と考えられているが、系譜伝承によれば十市県あるいは志貴県との関係が強いことから、それらの前身とする見解もある。^③ また、宇陀には「宇陀上・下県」や「猛田県」が確認される。^④ 高市郡の南部には渡来人が居住する「今来郡」があり、北部の高市県と併合されて立郡されたらしい。

一方、国造については後の城下郡大和郷付近を中心とする「倭国造」、葛木には「葛城国造」、山辺郡東部には「閼鶏国造」がみえるが、古い時代の設定を伝えるのみで活躍の記事は少なく、それぞれ志貴・葛木・山辺の各領域に吸収されていたと考えられる。また、吉野・宇智郡の地域は「吉野国主」が住み、「吉野国」と称される独立した地域で、御賢を献上するなど県的な性格が強い。^⑦

以上を図式化するとつぎのようになる。



このように、大和国では、県や国造国からの立郡または分割が一般的であったことが確認される。

なお、倭国六県のうち葛木・志貴・曾布県は上下の郡に分割されているが、その分割時期については、評から郡へ移行する大宝令の施行期が有力視されてきた。⁹ しかしながら、その有力な論拠とされていた山背国葛野郡の分割の事例が、「乙訓評」木簡の出現で再考を余儀なくされたことからすれば、¹⁰ 現状では蓋然性のレベルに留まり、明瞭な根拠を欠くこととなった。葛野郡の分割の事例を紹介された黛弘道氏自身も後に見解を修正され、浄御原令段階における分割とした。¹¹ 少なくとも藤原宮出土木簡にみえる「所布評大野里」の記載による限り、¹² 天武朝後半と想定される浄御原令の先行施行による「五十戸」記載から「里」記載への変化の後にも上下の分割はなされていないことが確認される。¹³ そして、『続日本紀』和銅元年九月乙酉条に「大倭国添上下二郡」、藤原宮出土木簡に「曾布上郡大宅里」¹⁴の記載があることから、遅くとも大宝令の施行直後には上下二郡に分割されていたことが確認される。いぜんとして、大宝令の施行に伴う分割の可能性は残るが、もう一つの可能性として持統三年（六八九）の飛鳥浄御原令の施行および翌年の同戸令に基づく庚寅年籍の作成が大きな画期として想定される。¹⁵ 天武朝後半期における令制国の成立や五十戸から里制への転換を経て、¹⁷ 持統朝に至り国や里と抵触する大小の評の存在が地方行政上問題化し、分割・併合による均質化が図られたことが考えられる。少なくとも改新の詔と戸令定郡条にみえる郡（評）の等級規定については、原理的に大きな違いが存在する。すなわち、後者が国や里の規模に考慮して二里から二十里の間を大上中下小の五段階に細分化するのに対して、前者は規模の振幅が大きく最大四十里、最小一里の間に大中小の三段階を設定するのみである。これは単なる里数の多少だけではなく、一国に匹敵する大郡（評）や一里に等しい小郡（評）が想定されていることが重要である。

大化改新詔

戸令定郡条

大郡 三十一〜四十里
中郡 四〜三十里

大郡 十六〜二十里
上郡 十二〜十五里
中郡 八〜十一里
下郡 四〜七里
小郡 二〜三里

小郡 一〜三里

当然ながら、大宝令以降における郡と連続しない評は、大評および小評が該当する。成立期の評が、遅れて天武朝後半期に成立する令制国や里の存在をあらかじめ想定せずに、その大小を設定していることは、なによりも行政区画としての未熟性を示すものであろう。¹⁸ さらに、封戸制の整備との関連で、課役や兵士役における戸の均質化が全国的な造籍である庚寅年籍により達成されたとするならば、¹⁹ 「五十戸」編成はその内実において単純に後の一里と等しい単位とはならないことは明らかであろう。²⁰ さらに、里制以前には、必ずしも五十戸の編成のみが唯一の編成原理ではなく、一部には三十戸などの編成も行われていたことが想定されている。²¹ この点が郡制下の里と大きく異なる点で、さらに伊場木簡第二一号の歴名簡にみえる「駅評人」も、令制下の駅家郷のように、常備すべき駅馬や駅子の数に規定されて駅戸数（大路二十戸・中路十戸・小路五戸）が定められていたとするならば、²² 五十戸以下の編成が想定される。評はこのように郡とは異なり、一里〜五十戸の編成を必ずしも前提とせず、二里以下でも任意の人間集団を編成できる点が大きな特質であったと考えられる。まさに里制施行直前の天武十一年（六八二）に越の蝦夷「七十戸」を「二郡」に編成したとあるのは、²³ 評制のこうした原理によると考えられる。国郡制下では二里以下の立郡は原則として認めら

れていないが、蝦夷や隼人などの人間集団に対しては、いわゆる陸奥国の「黒川以北奥郡」や薩摩国の「隼人十一郡」などのように、しばしばこうした編成が特例的に認められている。これは辺境における特殊な事例ではなく、「日本古代国家の系統発生を地域的規模でくり返している」と見るべきで、領域的・均質的な郡制への移行の前段階として、緩やかに人間集団を編成・支配するという評制の本質を典型的に示している。おそらく伴造―部民制的な旧来の編成原理を大きく転換することなしに（格別の抵抗がなかったのはこのためであろう）、人間集団と奉仕先の一对一の対応という限定をつけることが成立期の評の属性であり、国造だけでなく駅家（駅評）、神社（伊勢神郡）、宮（飽波評）など多様な奉仕先が存在したと考えられ、行政区画としての均質な領域性の保持は孝徳朝段階には深く考慮されていなかったのではなかろうか。極端に言えば、特定の奉仕先と人間集団の存在に規定されるのであるから、領域的には斑状な分布や飛び地的な在り方も存在したはずで、「奉仕根源」を異にする人間集団同士は容易に統廃合されない構造であったと考えられる。したがって、評という単位での貢納奉仕関係の一元化・明確化といういう意味において、孝徳朝の「天下立評」は理解すべきであり、郡に連続する領域的な行政区画としての側面は過大に評価できないと考える。

大化改新詔にみえる郡（評）の等級規定について、これをそのまま孝徳朝当時のものとするには、全国的に均質な里（五十戸）編成がなされていることが大前提となるが、少なくとも当時において均質な賦課（標準戸）を前提とした五十戸編成が行われていたとは考えられない。一方、郡（評）の等級が令制国や里との上下関係を考慮していない点において、大宝令以前の段階であったことは戸令定郡条と比較すれば明らかであろう。四十里という大郡（評）の上限や一里一郡という最小単位の設定が、令制国の成立および全国的規模での里制の施行以降においてはあまり現実味を持たないとするならば、それ以前の段階に想定することが可

能である。こうした大化改新詔にみえる郡（評）の等級規定の過渡期的な内容からすれば、未熟ながらも領域的編戸を前提に国評里制を構想する浄御原令段階ではありえず、「断盗賊与浮浪」とみえ、人間集団の身分的把握を目的とした庚午年籍段階に対応する規定であったと考えておきたい。

以上の検討によれば、大倭国の葛木・志貴・曾布評が上下に分割される時期は、領域的編戸を前提に国評里の体制が整備される持統四年（八九〇）の庚寅年籍から大宝令の国郡制施行の間までと考えられる。

大和国では、県や国造国からの立郡または分割が一般的であったが、例外的なのは忍海・広瀬・平群（飽波）の三郡である。三者に共通するのは、まず初期倭王権の有力な構成氏族であった葛城氏や平群氏の勢力圏に含まれながらも王宮を中心に独自の領域を構成している点である。さらに、奴婢や渡来系技術者の居住と密接な関係があり、有力豪族の拠点に対する倭王権の支配拠点・直轄地的な役割を果たしていたことが指摘できる。

まず忍海郡の郡名は大宝令施行直前の『続日本紀』大宝元年八月丁未条に初見するが、当郡が葛上郡と葛下郡の中間に位置し、すでに同文武四年十一月壬寅条に「大倭国葛上郡」の表記がみえることを考慮すれば、「郡」字の修飾はあるものの評制段階にはすでに立評されていた可能性が高い。当地には、『古事記』清寧段に「市辺忍爾別王之妹、忍海郎女、亦名飯豊王、坐葛城忍海之高木角刺宮也」、『日本書紀』顕宗即位前紀に「天皇姉飯豊皇女、於忍海角刺宮、臨朝秉政」とあるように飯豊皇女が居住した忍海角刺宮が所在する。この宮は「葛城忍海之高木角刺宮」と表記され広義の葛城地域に含まれる。地名にちなむ氏族としては、渡来系の鉄工技術者である忍海首・忍海漢人・忍海村主がおり、忍海造と忍海部については、忍海角刺宮に奉仕した名代とその伴造とする説もあるが、やはり忍海漢人らとの密接な関係は否定できない。いずれにしても

有力氏族は存在しないにもかかわらず、広義の葛城地域を分割する回廊のように設定されている点を重視するならば、王宮の経営や渡来系技術者集団の存在を前提に、倭王権の介入により上から設定された直轄地的な郡（評）であると位置づけられる。

つぎに広瀬郡についても、その領域が葛下郡にくい込む形で設定されており、広義の葛城地域を割いて成立したことが推定される。郡域内には勾金橋宮（安閑）・百濟大井宮（敏達）・百濟宮（舒明）・広瀬野行宮（天武）・水派（城上）宮（彦人大兄）など敏達系王族による多数の宮が経営されており、これらの諸宮には広瀬村常奴婢が奉仕した。奈良盆地を流れる諸河川の合流点として重要な位置にあり、天武朝には広瀬神の祭祀が頻繁に行われている。当地にも有力な氏族は居住しておらず、王宮の経営や国家的祭祀を前提に、倭王権の介入により上から設定された直轄地的な郡（評）であると位置づけられる。

忍海郡や広瀬郡と同様な傾向は、本稿で問題とする平群（飽波）郡においても指摘できる。平群郡本体は、『万葉集』に詠まれる平群山での薬狩の行事によれば、在地豪族平群氏による王権への奉仕が推測され、まさに「紀氏家牒」に「平群県」と表記されるように、倭国六県と同じく平群氏により奉仕される県的地域として位置づけられる。ただし、天武朝以降には、先述した広瀬社と並ぶ竜田社の国家的祭祀が開始され、様相はやや変化する。

一方、後の飽波郷・額田郷の地域は、独立した地域として評制下において複雑な変遷をする。

『日本書紀』天武五年四月辛丑条

倭国飽波郡言、雌鷄化雄。

正倉院藏法隆寺幡銘

阿久奈弥評君女子為父母作幡

天武紀にみえる「倭国飽波郡」の名前が、大宝令以降の郡名として確

認されないこと、『和名抄』によれば平群郡に飽波郷が存在すること、七世紀後半と推定される法隆寺幡銘に「飽波評」と記されること、などから『日本書紀』の「郡」字表記は潤色であるが、七世紀後半に「飽波（阿久奈弥）評」が設定されたことは確実視される。しかし、大宝令の郡制施行までは存続せず、隣接する平群郡に吸収合併されてしまったことが推測される。当地には、厩戸皇子の「飽波葦垣宮」、称徳朝の離宮として「飽浪宮」が営まれていた。これらの諸宮には「飽波村常奴婢」が奉仕したと推測され、法隆寺の奴が飽波宮で爵を与えられていることからすれば、いずれも本来的には上宮王家に隷属し、飽波地域に居住する奴婢集団が存在したと考えられる。さらに、阿智使主が朝鮮三国から仁徳朝に呼び寄せた渡来系技術者の子孫に「飽波村主」がいる。このように、飽波評の立評が宮および奴婢・渡来系技術者の居住と密接な関係を有し、倭王権の支配拠点・直轄地的な役割を果たしていたことが確認される。

飽波評の範囲については、郡は二里二百戸以上から構成されるという戸令定郡条の規定を意識して、飽波郷だけでなく東側の額田郷を含む領域的なまとまりを想定する説が有力である。しかしながら、第一に先述したように評が領域的な郡とは基本的に異なる人間集団の把握という構成原理を有すること、第二に飽波評が大宝令以降に郡として存続しないこと、第三に飽波評の奉仕対象である飽波宮の所在地として、近年の発掘調査により富雄川の西岸にある上宮遺跡が有力視されるようになり評の想定領域からはずれること、などを重視するならば飽波評を令制下の郡と同じように飽波郷だけでなく額田郷を含む二郷以上から構成され、富雄川と佐保川間の領域的なまとまりを持つはずだという先入観念を捨てる必要がある。なによりも大宝令以降に連続しないということからは、郡としての基本的な要件を欠いていることの裏返しであり、にもかかわらず評として存在したことは飽波評にこそ郡との異質性、すなわち評としての独自性が示されていると考えなければならない。このように

考えるならば、額田地域の所屬を示す次のような記載は無視できない。

『日本書紀』仁賢六年是歲条

日鷹吉士、還自高麗、献工匠須流枳・奴流枳等。今大倭国山辺郡額田邑熟皮高麗、是其後也。

『続日本紀』天平十六年十月辛卯条

律師道慈法師卒。天平元年為律師。法師、俗姓額田氏、添下郡人也。

すなわち、前者は日鷹吉士が高麗から還つて、工匠の須流枳・奴流枳等を献じたとする記載で、『日本書紀』編纂時点において大倭国山辺郡額田邑の熟皮高麗がその後裔であると注記する。ちなみに『大和志』は額田邑の所在地について、「嘉幡村西十町許有皮工邑隣平群郡額田部村」と記し、『新撰姓氏錄』には渡来系技術者として「額田村主」がみえる。

後者は、大安寺（大官大寺）の平城京移転に功績があつた道慈で、俗姓額田氏、添下郡出身とする。前者の注記は『日本書紀』の編纂が開始された天武十年以降、養老四年の撰上の間、後者は卒時において七十有余歳とあることから天智朝から天武朝初期にかけての生まれと推定される。すなわち、額田郷の地域が大宝令の施行までに平群郡域へ編入されたとするならば、七世紀後半には山辺評あるいは所布評に所屬した可能性を示唆する。これまで、この二つの史料は平群郡とは異なる所屬を示すため、令制下の郡域を前提にする限り、明瞭な位置づけができなかった。おそらく下つ道によって郡域を区分し、西側を平群郡域とするようになるのは、大宝令の施行以降であり、それ以前には人間集団の把握に対応して、後の額田郷域の北部は所布（または添上）評、東南部（大和川と佐保川および下つ道に挟まれた地域）は山辺評として把握されたと考えられる（図1参照）。

さらに、山辺郡額田邑の熟皮高麗について、『令集解』職員令大藏省条の古記・令釈には狛戸の注釈として

別記云、忍海戸狛人五戸、竹志戸狛人七戸、合十二戸。役日無限、

但年料牛皮廿張以下令作。村々狛人三十戸、宮郡狛人十四戸、大狛染六戸、右五色人等為品部、免調役也。

とあり、別記が引用されているが、これら五色の狛戸のなかに含まれる可能性が高い。額田邑とあることからすれば「村々狛人三十戸」に含まれるとも考えられるが、もし「宮郡狛人十四戸」の宮郡を大宝令以前に存在した飽波宮を中核とする郡（評）、すなわち飽波評に比定することが可能ならば、領域的には他評（山辺評）に属する人間集団を飛び地的に支配していたことが想定される。加えて、額田寺が「熊凝」（くまごおり）寺と呼ばれており、「くま」が「隈」の意で、郡（評）境を示すとすれば、「飛び地」的に評の中心から遠くはずれた場所を示す表現として理解が可能である。

このように額田郷の地域が七世紀後半において隣接する他評に含まれていた可能性が高いとするならば、飽波評は後の飽波郷の地域（富雄川と岡崎川に挟まれた三角地帯）に限定され（庚寅年籍以前には熊凝に位置し「宮郡狛人十四戸」とされる品部集団も含まれる可能性がある）、一里五十戸程度から構成される小規模な評であつたと想定される。さらに、その奉仕先が夜摩（屋部）郷に属する富雄川対岸の飽波宮であつたとするならば、領域を越えた奉仕関係が想定される。さらに、人間集団と奉仕先の一対一の対応という評の基本的属性を前提にするならば、領域的には斑状な分布や飛び地的な在り方が理論上あり得ることを論じたが、まさに飽波郷および額田郷の地域は、七世紀後半において平群・飽波・所布・山辺という四つ評が奉仕関係により領域的には錯綜していたことが想定されるのである。

大宝令以降における平群郡は、こうした錯綜した関係を領域的に再編し、下つ道という人為的な直線道路を郡境とし、一里から構成され、かつ宮を奉仕先とする領域的には特殊な評を廃止、併合することにより、均質な里を基礎単位とする行政区画として完成する。

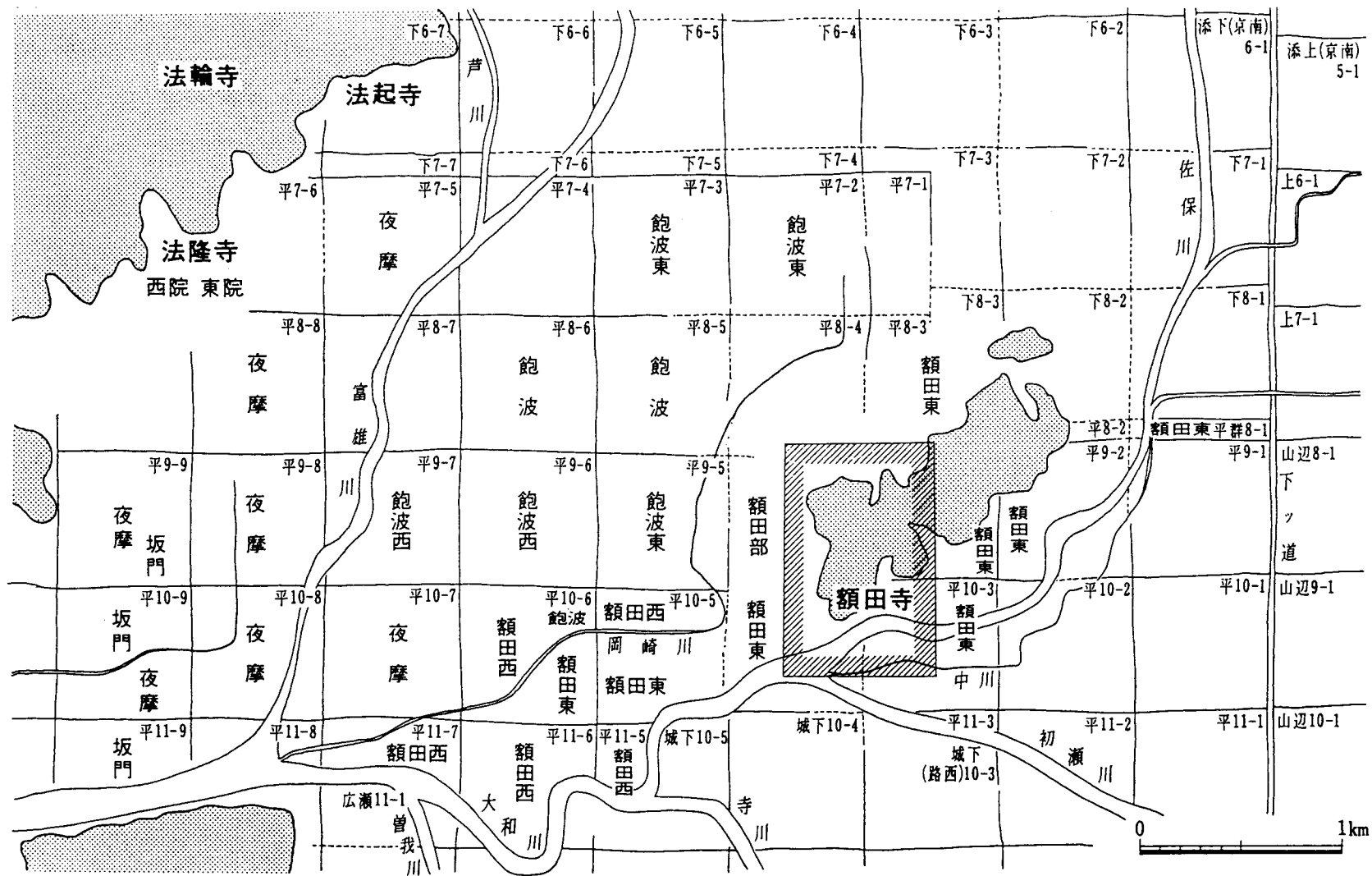


図1 鮑波評とその地勢 ◎狩野久「額田部連と鮑波評」(『日本古代の国家と都城』
東京大学出版会、1990年、初出1984年)図2より。

<p>(都保朝臣) 都久足尼之後 平群朝臣同族 馬工連 (馬御機連) 平群県(額田里?) 額田駒宿禰の後裔 平群郡久宿禰の後裔 平群臣同族</p>	<p>物部氏系 坂戸物部 中臣熊凝連 (熊凝朝臣) 平群郡坂戸郷 神饒速日命の後裔、物部連同族 中臣熊凝朝臣からの改姓 五百嶋 熊凝寺・熊凝村 平群郡熊凝道場 熊凝寺 平群郡額田郷額田寺</p>	<p>渡来系 高麗よりの工匠の子孫 吳国人、平群郡額田郷? 仁德朝渡来 仁德朝渡来、平群郡鮑波郷? 仁德朝渡来 平群郡保證刀禰 豊山 平群郡擬少領 欠名 阿古、誓願幡、和銅七年十二月 平群郡坂門郷戸主少初位上男君・ 戸口長嶋 法隆寺への写経施入 □刀古 法隆寺への写経施入 三子 僧正福亮、呉人 平群郡九条三三十一坪千虫家(額田郷) 新羅系渡来 平群郡皇子舎人 麻呂 平群郡十條四里四坪壺田主(額田郷) 応仁朝渡来</p>
<p>奥書 〔蜜衆遺文〕中卷六二頁 〔新撰姓氏録〕右京皇別 都保朝臣 〔紀氏家牒〕 〔古事記〕孝元段</p>	<p>〔和名抄〕 〔新撰姓氏録〕右京神別上 中臣熊凝朝臣 〔続日本紀〕天平十七年八月条 〔大安寺伽藍并流記資財帳〕 三代表録 元慶四年十月二十日条 〔聖德太子伝私記〕下巻</p>	<p>〔日本書紀〕仁賢六年是歳条 〔新撰姓氏録〕大和国諸蕃 額田村主条 〔坂上系図〕所引〔新撰姓氏録〕逸文 〔坂上系図〕所引〔新撰姓氏録〕逸文 〔坂上系図〕所引〔新撰姓氏録〕逸文 〔平安遺文〕一一六三号文書 貞觀十一年 〔唐招提寺史料〕一一〇六号文書 〔平安遺文〕一一三二二号文書 延長六年 法隆寺幡銘〔法隆寺良訓補志集〕 勘籍歴名〔大日古〕編年 二五九三頁 〔瑜伽師地論〕卷第八十 天平四年 〔法隆寺良訓補志集〕 〔普超三昧經〕卷中 永久三年 〔法隆寺の至宝〕七二五三頁 〔僧綱補任抄出〕上 僧正福亮条 〔額田寺伽藍並条里図〕 〔新撰姓氏録〕和泉国諸蕃日根造 〔上宮聖德太子伝補記〕ほか 〔額田寺伽藍並条里図〕 〔坂上系図〕所引〔新撰姓氏録〕</p>

<p>内蔵 津守 上宮王家系 法隆寺への写経施入 恒定 法隆寺への写経施入 善財(坂門郷?) 法隆寺への写経施入 姉子(坂門郷?) 法隆寺への写経施入 三子(坂門郷?)</p>	<p>山部連 (山部宿禰) 平群郡人 東人 和銅五年五月 平群郡屋部郷(山部郷) 平群郡夜麻郷(山部郷) 山部殿奴 辛酉年三月六日 山部五十戸婦 癸亥年 山部名嶋豆古連公 山部連公奴 膳臣斑鳩 膳臣斑鳩、膳臣住宅 法輪寺増越、膳臣住宅 平群郡夜摩郷? 高安本宅(高橋宮) 平群郡鮑波郷? 現斑鳩町高安に小字「高橋」 平群郡額田東郷九条三里四坪付近 〔カシワテ〕・〔カシハテ〕・〔膳手〕 平群郡皇子妃(膳菩岐々美郎女) 平群郡東条一平群里 紀氏神社 平群郡保證刀禰 朝臣氏世・本男 平群郡刀禰 朝臣良茂・安流 平群郡夜摩郷十條八里三坪田地 〔紀嫡子先祖相伝私領〕 山背大兄王即位支持の大夫 紀臣塩手 平群郡保證刀禰 宗雄</p>	<p>膳臣 (高橋朝臣) 〔聖德太子伝私記〕 〔大和郡山市史〕史料集 額安寺古文書 〔法王帝説〕、〔上宮記〕逸文 〔延喜式〕神名上 〔平安遺文〕一一六三号文書 貞觀十一年 〔唐招提寺史料〕一一〇六号文書 〔平安遺文〕一一三二二号文書 延長六年 〔平安遺文〕八四〇七五号文書 寿永二年 〔日本書紀〕舒明即位前紀 〔平安遺文〕一一六三号文書 貞觀十一年 〔唐招提寺史料〕一一〇六号文書 〔法王帝説〕、〔上宮記〕逸文 〔平安遺文〕一一六三号文書</p>
<p>録〕逸文 法隆寺一切経〔須摩提菩薩經〕 永久三年 〔法隆寺の至宝〕七二五〇頁 法隆寺一切経〔大方広入如来 智徳不思議經〕永久四年 〔法隆寺の至宝〕七二六四頁 同右 同右</p>	<p>〔平城宮出土木簡概報〕六一五頁 〔法隆寺伽藍縁起并流記資財帳〕 〔和名抄〕 東京国立博物館蔵法隆寺幡銘 〔法隆寺献納宝物銘文集成〕 正倉院蔵法隆寺幡銘 〔正倉院年報〕四 〔日本書紀〕雄略八年二月条 卷子本〔聖德太子伝私記〕</p>	<p>石川朝臣 (蘇我臣) 間人宿禰 平群郡保證刀禰 家吉</p>

いる。⁵⁶⁾

平群郡内に居住する古代氏族をおおよそこのように位置付けたうえで、以下では額田部氏の系譜と職掌を検討する。⁵⁷⁾これまでの額田部氏研究の流れは、その分布と職掌の考察が主流であった。しかし、地名額田と氏族名額田部の違いや、氏族系統については、曖昧なままで職掌を議論してきた傾向は否定できない。本位田菊士氏のもとめによれば、⁵⁸⁾これまで(A) 田部、(B) 鋳物造りの品部、(C) 名代、(D) 額田部首の部曲などの説が提起されているが、このうち応神天皇の子額田大中彦に比定する名代説が現在のところ有力とされている。⁵⁹⁾ただ、応神天皇および額田大中彦の実在性や部民制の成立時期、さらには額田部の設置記載がないこと、などからすれば応神朝における制度的な名代設定には否定的にならざるをえない。なによりも「額田部湯坐連」の複姓が存在することは、湯坐は額田部の本来的職掌ではなく、皇子女の養育が二次的職掌であることを示している。⁶⁰⁾

『新撰姓氏録』左京神別下

額田部湯坐連

天津彦根命子明立天御影命之後也。允恭天皇御世。被遣薩摩国。平隼人。復奏之日。献御馬一匹。額有町形廻毛。天皇嘉之。賜姓額田部也。

『新撰姓氏録』大和国神別

額田部河田連

同神(天津彦根命)三世孫意富伊我都命之後也。允恭天皇御世。献額田馬。天皇勅。此馬額如「田町」。乃賜姓額田連也。

額田部の起源伝承については、允恭朝に薩摩国の隼人征討にかかわり「額田馬」の貢上が行われたことが語られているが、額田部が二次的に馬の飼育・貢上に関係したことは事実としても、馬の額の形状にちなむとの記載は、やはり本来の職掌が忘れられた後の付会と考えられる。『新撰

姓氏録』が『日本書紀』よりも新しい時期に、異なる起源伝承を掲載していることは額田大中彦の名代説には不利な条件であろう。私見では、複姓に付された「河田(皮田?)」「湯坐」などの職掌は二次的に分化したもので、本来的なものとは考えず、河内国の額田部湯坐連が天津彦根命の五世孫「平田部連」の後であるとの記載から田部説を支持したい。すなわち、「平田部」が「小田部」であるとするならば、「額」も狭い隆起した場所を連想するところからの同義語と考えられる。⁶¹⁾たとえば、舒明天皇の和風諡号「息長足日広額天皇」にみえる「広額」も、本来は額が一般的に狭いことを前提に、容貌において額が広い聡明な天皇であることの美称として用いられている。このように額田部が大田部に対する「小田部」の意であったとするならば、全国に分布し格別の起源伝承が「記紀」に見えないことも合理的に説明できる。『和名抄』によれば、額田部あるいは額部郷は全国に十四郷(一駅)が確認される。

大和国平群郡額田郷 河内国河内郡額田郷 伊勢国桑名郡額田郷
伊勢国朝明郡額田郷 三河国額田郡額田郷 上総国周准郡額田郷
美濃国池田郡額田郷 上野国甘菜郡額田郷 越前国足羽郡額田郷
加賀国江沼郡額田郷 備中国哲多郡額田郷 備後国三溪郡額田郷
長門国豊浦郡額田郷 筑前国早良郡額田郷(額田駅)

このうち額部郷は額田部郷の二分化であり、⁶²⁾額田部の居住は確実である。一方、額田郷のうちには地名額田(糠田)にちなむものも含まれている可能性が残るが、その多くに額田部氏の居住が確認される(表2参照)。これまで、額田部氏の本拠地と考えられてきたのは大和国平群郡額田郷または河内国河内郡額田郷であるが、生駒山脈を挟んで両郡は境を接しており、氏族系統においても後述するように天津彦根系(額田部河田連・額田部湯坐連)と平群氏系(額田首)の額田氏が居住していた。先述したように、天津彦根系の額田部河田連と額田部湯坐連はいずれも、允恭朝に薩摩国の隼人征討にかかわり「額田馬」の貢上が行われたこと

国郡	郷里	姓氏	身分	出典
北陸道				
若狭 越前 今立 足羽 (加賀) 江沼 石川	中山 野田 井出	額田部 額田部 額田郷 額田 額田郷 額田部	戸主・戸口 中津里 戸主 戸主・戸口 旧加賀郡	『平城宮木簡』2-1953号 天平18年 『平城宮出土木簡概報』25-30頁 『和名抄』 『大日古』編年5-545頁 『和名抄』 『平城宮出土木簡概報』22-34頁
山陰道				
但馬 出石 出雲 意宇 出雲 秋鹿 大原 石見 美濃 隠岐 智夫	出石? 山代 漆沼 杵築 杵築 屋裏 賀太 大井 宇良	額田部 額田部臣 額田部 額田部 額田部首 額田部臣 額田部臣 額田部 額田部 額田部	戸口 岡田山一号墳被葬者 深江里戸口 因佐里戸主・戸口 戸主・戸口 部領使 少領外従八位上 前少領 賀太里戸主・戸口 節婦 白浜里人	宮内黒田遺跡出土木簡 天平勝宝4年 〔『木簡研究』21-76頁〕 岡田山一号墳出土大刀銘 『大日古』編年2-206頁 『大日古』編年2-221頁 『大日古』編年2-224頁 『大日古』編年1-603頁 『出雲国風土記』大原郡 『出雲国風土記』大原郡 『大日古』編年1-589頁 『続日本紀』神護景雲二年二月癸未条 『平城宮出土木簡概報』16-7頁 『平城宮出土木簡概報』24-38頁
山陽道				
播磨 美芸 備前 備中 哲多 備後 哲多 周防 三溪 長門 玖珂 豊浦 豊浦 豊浦 豊浦	横川 玖珂	額田部 額田部 額田 額部郷 額田部里 額田郷 額田部 額田部 額部郷 額田部直 額田部 額田部直 額田部直	一乗寺丸瓦銘 (3) 戸主・戸口 備前国馳駅使健兒 額田部 戸口 (早良部姓多数) 銅駄馬丁 (4) 黒毛・赤毛・鹿毛草馬 部領使・擬大領正八位下 少領外正八位上 外正八位上→外従五位下 豊浦団穀外正七位上 →大領外従五位上	『平安遺文』金石451~453号 承安4年 『大日古』編年15-257頁 『本朝世紀』天慶四年九月十九日条 『和名抄』 『平城宮木簡』3-3295号 『和名抄』 『平安遺文』1-199号文書 延喜8年 長登銅山遺跡出土木簡 (『木簡研究』 18-171頁, 19-193・196・198頁) 『和名抄』, 『木簡研究』18-171頁 『大日古』編年2-133頁 『続日本紀』天平十二年九月戊申条 『続日本紀』天平十三年閏三月乙卯条 『続日本紀』神護景雲元年四月戊申条
南海道				
讃岐 大内	入野	額田部	戸主・戸口 (15)	『平安遺文』2-437号文書 寛弘元年
西海道				
筑前 早良 嶋 豊後 肥後 宇土	川辺 大宅	額田部連 額田 額田郷 額田駅 額田部 額田部直 額田部 額田部君 額田部	大宰府史生従八位上 検郭使 (他に平群・早良・田部郷) 戸口 (6) 戸口 寄口 戸主 戸口	『大日古』編年14-270頁 『平安遺文』2-365号文書 長徳2年 『和名抄』 『和名抄』 『大日古』編年1-101~140頁 『大日古』編年1-217頁 『大日古』編年1-216頁 『大日古』編年25-145頁 『大日古』編年25-145頁

◎井上辰雄「額田部と大和王権」(鶴岡静雄編『古代王権と氏族』古代史論集二、名著出版、1988年)を参考に、増補改訂した。

表2 額田部氏の分布

国郡	郷里	姓氏	身分	出典
畿内				
山城 左京		額田部湯坐連	神別 天津彦根命系	『新撰姓氏録』左京神別下
右京		額田部	神別 天津彦根命系	『新撰姓氏録』左京神別下
		額田部宿禰	神別 明日名門命系	『新撰姓氏録』右京神別上
?		額田部毬玉	神別 明日名門命系	『新撰姓氏録』右京神別上
愛宕		額田臣	神別 伊香我色雄命系	『新撰姓氏録』山城国神別
愛宕?		額田里		『平安遺文』5-1801号文書 永久元年
相楽		額田部宿禰	神別 明日名門命系	『新撰姓氏録』山城国神別
大和 添下		額田村	稻間庄	『平安遺文』3-1083号文書 延久4年
山辺		額田	道慈	『続日本紀』天平十六年十月辛卯条
		額田邑	熟皮高麗	『日本書紀』仁賢六年是歳条
	南	額田		『平安遺文』9-4581号文書 長保元年
平群?		額田臣	皇別 布留宿禰系	『新撰姓氏録』大和国皇別
平群?		額田部河田連	神別 天津彦根命系	『新撰姓氏録』大和国神別
平群?		額田部川田連	外従五位下、額田部宿禰	『続日本紀』天平宝字二年七月丙子条
平群?		額田村主	諸蕃 吳国人出自	『新撰姓氏録』大和国諸蕃
平群		額田郷		『和名抄』
平群	額田	額田首	額田里居住	『紀氏家牒』
平群	額田	額田部宿禰	船墓被葬者	「額田寺伽藍並条里図」
平群	平群	額田早良宿禰	子は額田駒宿禰 平群系	『紀氏家牒』
平群			擬主帳	『平安遺文』1-163号文書 貞観12年
	夜麻?	額田部	山を所有	『唐招提寺史料』1-106号文書
			少領	『平安遺文』1-231号文書 延長6年
平群		額田部	大領兼惣行事	『平安遺文』1-264号文書 天曆6年
城上	押坂	額田部連	西乃久保薬 忍坂坐生根神社	『大日類聚方』巻75
摂津		額田部宿禰	神別 明日名門命系	『新撰姓氏録』摂津国神別
		額田部	神別 明日名門命系	『新撰姓氏録』摂津国神別
河内		額田部湯坐連	神別 天津彦根命系	『新撰姓氏録』河内国神別
河内		額田郷		『和名抄』
河内	額田?	額田首	式部位子 従六位下	『続日本後紀』承和十三年九月辛亥条
河内?	額田?	額田首	皇別 平群氏系	『新撰姓氏録』河内国皇別
河内	額田?	額田真人	陰陽寮史生正六位上	『平安遺文』9-4550号文書 昌泰2年
高安		三条額田		『平安遺文』10-4904号文書 承平7年
東海道				
伊勢 桑名		額田郷		『和名抄』
		額田神社		『延喜式』神名上
朝明		額田郷		『和名抄』
尾張		額田首	尾張国大目	『平安遺文』1-97号文書 嘉承3年
海部?		額田部	主帳外大初位上勲十二等	『大日古』編年1-613頁
三河 額田		額田郷		『和名抄』
額田		額田郷		『平城宮出土木簡概報』19-20頁
額田		額田部連	額田薬	『大同類聚方』巻75
武蔵 足立?		額田部槻本首	千熊長彦(糠田邑)	『日本書紀』神功四十七年四月条分註
上総		額田	検田使書生大判官代	『平安遺文』5-2440号文書 保延6年
		額田郷		『和名抄』
周准		額田部	戸主	『正倉院宝物銘文集』310頁
周准	額部	額田部	戸主	『平城宮木簡』1-338・339号
(安房) 朝夷	健田	額田部	仕丁(中世地名額田)	『大日古』編年14-284頁
常陸 久慈?	神前?	額田部		
東山道				
近江 浅井		額田	権少僧都	「天台座主記」(『群書類従』4-602頁)
美濃 池田		額田郷		『和名抄』
		額田国造		『先代旧事本紀』
味蜂間	春部	額田部	戸口(3)	『大日古』編年1-9・15・22頁
本簀	栗栖太	額田部	戸口(8)	『大日古』編年1-29頁
各牟	中	額田部	戸口	『大日古』編年1-48頁
武義		額田	蓮華寺菩薩形坐像銘	『平安遺文』金石補遺45号
上野 甘奈		額部郷		『和名抄』
緑野	小野	額田部	戸主	『正倉院宝物銘文集』305頁
陸奥		額田部	岩手県黒石寺	『平安遺文』金石21号 貞観4年

が語られている。一方、平群氏の同族には額田首氏がおり、天皇への馬献上の説話が伝えられている。

『新撰姓氏録』河内国皇別

額田首

早良臣同祖、平群木兔宿禰之後也。不_レ尋父氏。負母氏額田首。⁶⁵

『紀氏家牒』

又云、額田早良宿禰男、額田駒宿禰、平群県在馬牧、挾駿駒養之。献天皇。勅賜姓馬工連、令掌飼。故号其養駒之处曰生駒。

『紀氏家牒』

紀氏家牒曰、平群真鳥大臣弟、額田早良宿禰家、平群県額田里。不_レ尋父氏、負母氏額田首。⁶⁶

両氏ともに馬の飼育・献上についての起源伝承を有していることは、両地域が地理的に近いだけでなく、平群氏を媒介にして民族的にも職掌的にも一体のものとして機能していることは注意される。⁶⁶ 額田部氏の全国分布のうち、周防国玖珂郡玖珂郷には額田部とともに早良部の居住が確認され、長門国の長登銅山では「銅駄馬丁」として四名の額田部がみえる。⁶⁷ さらに『和名抄』によれば筑前国早良郡には額田郷とともに平群・早良郷が確認され、薩摩に近い日向国児湯郡には平群郷がある。このように中国・九州地域では、額田部氏は平群氏や同族の早良臣との関係が深く、馬の飼育にも関与している。井上辰雄氏によれば、百済・新羅との外交に活躍したとの伝承を持つ平群氏が、日向の隼人服属に関与していたことが指摘されている。⁶⁸ 「馬ならば日向の駒」と詠まれたように、日向は駿馬の産地であり、おそらく馬の飼育・献上伝承は本来的に朝鮮半島や日向と交渉を有する平群氏において伝承されたものが、天津彦根系の額田部氏にも拡大し「額田馬」の伝承が形成されたと考えられる。つぎは『新撰姓氏録』にみえる額田部関連氏族の分析を行う。『新撰姓

氏録』には関係氏族として以下の十三の氏族を掲載する。

(1) 大和国皇別 布留宿禰(額田臣)

柿本朝臣同祖。天足彦国押人命七世孫米餅搗大使主之後也。男木事命。男市川臣。大鷦鷯天皇世。達倭賈布都努斯神社於石上御布瑠村高庭之地。以市川臣為神主。四世孫額田臣。武藏臣。齊明天皇御世。宗我蝦夷大臣。号武藏臣物部首并神主首。因茲失臣姓為物部首。男正五位上日向。天武天皇御世。依社地名改布留宿禰姓。

(2) 河内国皇別 額田首

早良臣同祖、平群木兔宿禰之後也。不_レ尋父氏。負母氏額田首。

(3) 左京神別下 額田部湯坐連

天津彦根命子明立天御影命之後也。允恭天皇御世。被遣薩摩国。平隼人。復奏之日。献御馬一匹。額有町形廻毛。天皇嘉之。賜姓額田部也。

(4) 左京神別下 額田部

同命(天津彦根命)孫意富伊我都命之後也。

(5) 右京神別上 額田部宿禰

明日名門命三世孫天村雲命之後也。

(6) 右京神別上 額田部毬玉

額田部宿禰同祖。明日名門命十一世孫御支宿禰之後也。

(7) 山城国神別 額田臣

伊香我色雄命之後也。

(8) 山城国神別 額田部宿禰

明日名門命六世孫天由久富命之後也。

(9) 大和国神別 額田部河田連

同神(天津彦根命)三世孫意富伊我都命之後也。允恭天皇御世。献額田馬。天皇勅。此馬額如田町。乃賜姓額田連也。

(10) 摂津国神別 額田部宿禰

同神(角凝魂命) 男五十狹経魂命之後也。

(11) 摂津国神別 額田部

額田部宿禰同祖。明日名門命之後也。

(12) 河内国神別 額田部湯坐連

天津彦根命五世孫乎田部連之後也。

(13) 大和国諸蕃 額田村主

出自「吳国入天國古」也。

これら为本貫地ごと、さらには氏族系統ごとに額田部氏系の氏族を集成するならば、以下ようになる。

・居住地

左京 額田部湯坐連・額田部

右京 額田部宿禰・額田部尾玉

山城国 額田部宿禰・額田臣

大和国 額田部河田連・布留宿禰(額田臣)・額田村主

摂津国 額田部宿禰・額田部

河内国 額田部湯坐連・額田首

・氏族系統

天津彦根系 額田部湯坐連(左京神別下)・額田部(左京神別下)

額田部河田連(大和国神別)

額田部湯坐連(河内国神別)

明日名門系 額田部宿禰(右京神別上)・額田部尾玉(右京神別上)

額田部宿禰(山城国神別)

額田部宿禰(摂津国神別)・額田部(摂津国神別)

伊香我色雄系 額田臣(山城国神別)

平群氏系 額田首(河内国皇別)

諸蕃(吳国)系 額田村主(大和国諸蕃)

春日氏系 布留宿禰(額田臣)(大和国皇別)

このうち、左右京に居住する氏族の本貫地は明らかではないが、氏族系統からすれば、左京の額田部湯坐連と額田部は天津彦根系で、大和国または河内国、右京の額田部宿禰と額田部尾玉は明日名門系で、山城国または摂津国からの移住者である可能性が高い。大きくは大和・河内国を中心とする天津彦根系および、山城・摂津を中心とする明日名門系の二系統に分類が可能であり、その他の平群氏系・諸蕃(吳国)系・春日氏系の額田は部名ではなく、額田邑(後の大和国平群郡額田郷)の居住地にちなむ名前であり、前者の系統、伊香我色雄系も物部氏との関係からすれば前者との関係が深いと位置付けられる。姓については天津彦根系がすべて連姓であるのに対して、明日名門系は宿禰姓で、明瞭な区別が存在する。氏族系譜をまとめるならば、以下のような関係となる。

・天津彦根命 明立天御影命 意富伊我部命 乎田部連

(左京神別下) (左京神別下) (河内国神別)

額田部湯坐連 額田部 額田部湯坐連

(大和国神別) 額田部河田連

・五十狹経魂命 明日名門命 天村雲命 天由久富命 御支宿禰

(摂津国神別) (摂津国神別) (右京神別上) (山城国神別) (右京神別上)

額田部宿禰 額田部 額田部宿禰 額田部尾玉

『古事記』天安河誓約段によれば、天津彦根命は天照大御神の子であり、

(10) によれば五十狹経魂命は角凝魂命の子とある。さらに角凝魂命は

『新撰姓氏録』山城国神別税部条に「神魂命子角凝魂命之後」とあるところから、神魂命の子となる。神魂命・角凝魂命の神系には山城の賀茂県

主、河内の三野県主が属しており、明日名門命系の額田部宿禰はこれら

氏族との同族的関係を有していたと考えられる。^⑦山城の賀茂県主につい

ては、『新撰姓氏録』山城国神別に額田部宿禰に続いて、神魂命の後とし

て賀茂県主と鴨県主が見える。同氏は上賀茂・下鴨社のある山城国愛宕

郡賀茂郷(現北区上賀茂・左京区下鴨)を本拠地とした。ちなみに、永

久元年（一一一三）の玄蕃寮牒案には額田里・額田里東外・額田西里などの条里名称が見え、文永三年（一二六六）の主水司氷室田畠注進状によれば、このうち額田里が愛宕郡出雲郷内とされるところから、現在の左京区高野・一乗寺付近に比定することができる。下鴨社に近接した位置に額田里が存在することから、（8）山城国神別の額田部宿禰氏（明日名門命）は賀茂県主との同族関係により、当地に居住したことが想定される。

一方、『古事記』『日本書紀』の系譜記載には、『新撰姓氏録』にみえる天津彦根命系と明日名門命系という二つの系譜のうち前者の系譜のみが記載されている。

『古事記』天安河誓約段

天津日子根者、凡川内国造、額田部湯坐連、……等之祖也

『日本書紀』神代上、第七段一書第三

天津彦根命。此茨城国造、額田部連等遠祖也。

『先代旧事本紀』天神本紀

天斗麻弥命 額田部湯坐連等祖。

このことは、『記紀』編纂段階までは、額田部湯坐連を中心とする天津彦根命系の連姓額田部氏が有力であったことを示すものと考えられる。しかしながら、欽明朝以降に散見される額田部氏のうち、額田部連とある表記については、いずれの系統かは明らかでない。通説では天津彦根命系の額田部連が天武十三年に宿禰に改姓したと考えられているが、そうすると『新撰姓氏録』に天津彦根命系の額田部宿禰がみられないことが大きな問題として残る。⁷⁵『記紀』の系譜記載と『新撰姓氏録』を整合させるためには、天武十三年に宿禰に改姓した額田部宿禰は明日名門命系でなければならない。そうすると、欽明・推古紀などに散見する額田部連氏の系統が問題となる。

『日本書紀』欽明二十二年是歲条

復遣「奴氏大舍」、献「前調賦」。於「難波大郡」、次序諸蕃、掌客額田部連、葛城直等、使「列于百濟之下」而引導。大舍怒還。不「入館舍」。乘「船歸至穴門」。

『日本書紀』推古十六年八月癸卯条

唐客入京。是日、遣「飾騎七十五匹」、而迎唐客於海石榴市術。額田部連比羅夫、以告「礼辞焉」。

『隋書』倭国伝

又遣「大礼哥多昆」、從「二百余騎」郊勞。

『日本書紀』推古十八年十月丙申是日条

命「額田部連比羅夫」、為「迎新羅客」莊馬之長。以「膳臣大伴」為「迎任那客」莊馬之長。即安「置阿斗河辺館」。

『日本書紀』推古十九年五月五日条

葉「獵於菟田野」。取「鷄鳴時」、集「于藤原池上」。以「会明」乃往之。粟田細目臣為「前部領」。額田部比羅夫連為「後部領」。

推古朝の額田部連比羅夫については、推古女帝の幼名が額田部皇女であり、額田部氏が養育氏族であったと考えられ、その関係により外国使節に対する莊馬の長に起用されたと推定される。その系統については、天津彦根系が大和・河内を本拠とし、海石榴市・阿斗河辺館・藤原池などその活躍の場が大和国であることと対応する点、「額田馬」の貢上や「湯坐」の職掌を有すること、『古事記』『日本書紀』の系譜記載に明記されていること、推古朝以降には活躍しないこと、などからこの系統の出身者であったと考えられる。ただし、欽明紀の額田部連については、難波の大郡での奉仕とあることから山城・摂津を本拠とする明日名門系額田部連（天武朝での宿禰改姓以前は連）の可能性も残る。この時額田部連は新羅客を怒らせたとあり、「大舍還国、告其所言」とあるように、そうした情報は本国に伝わっていたにもかかわらず、再び推古朝に新羅客を迎える莊馬の長に任命されているのは、同姓ながら異なる系統の額

田部連に交替した可能性も考えられる。欠名なのは、そうした事情を示すものとも考えられる。いずれの系統にしても、天武朝以前の額田部連の表記については、両様の可能性があることを想定しなければならない。明日名門系額田部連の活動については、必ずしも明瞭ではないが、『播磨国風土記』にみえる以下の記載はその可能性が高い。

『播磨国風土記』揖保郡意此川条

意此川 品太天皇之世、出雲御蔭大神、坐於枚方里神尾山、每遮行人、半死半生。爾時、伯耆人小保弓、因幡布久漏、出雲都伎也、三人相憂、申於朝廷。於是、遣額田部連久等々、令禱。于時、作屋形於屋形田、作酒屋於佐々山、而祭之。宴遊甚樂、即櫟山柏、桂帶捶腰、下於此川相壓。故号壓川。

ここにみえる額田部連久等々は「品太天皇之世」すなわち応神朝に、朝廷から派遣されて、在地の人々の往来を妨害していた神尾山の「出雲御蔭大神」を神事により鎮圧したとある。この神尾山の「出雲御蔭大神」は、佐比岡条の別伝では「出雲大神」とあり、河内の漢人らが僅かに和し鎮めることができたのである。伝承的な地名起源説話であり、応神朝という年代は信用できないが、なぜ額田部連久等々が特別に朝廷から派遣され、彼のみが「出雲御蔭大神」Ⅱ「出雲大神」を鎮圧できたのか問題となる。これまで、「出雲御蔭大神」の名は、一説に『新撰姓氏録』左京神別下額田部湯坐連条に「天津彦根命子明立天御影命之後也」とあることから、天御影命の名を移したものと考えられてきた。⁷⁾しかしながら、「出雲御蔭大神」または「出雲大神」にみえる大神の表記は、『出雲国風土記』によれば熊野大神、野城大神、佐太大神、所造天下大神（大穴持命）に限定されており、『記紀』では杵築大社の神である大国主命（大穴牟遲神）に用いられている。⁸⁾御蔭についても、『出雲国風土記』神門郡蔭山条には、『蔭山 郡家東南五里八十六步大神之御蔭』とあり、この山が所造天下大神（大穴持命）の御蔭すなわち髪飾りとして位置付けられている。⁹⁾出雲大神

との表記を重視するならば、揖保郡の神尾山も他に所見がない天御影命ではなく、所造天下大神（大穴持命）の御蔭すなわち髪飾りに擬せられたものではないか。¹⁰⁾「出雲御蔭大神」の主体を大国主命（大穴持命）と考えるならば、『古事記』上巻にみえる稲羽の八上比売との婚姻をめぐって、多くの兄弟神たちの策略により大国主神（大穴牟遲神）が殺された時、神産巢日之命（神魂命）が母神の願いを聞き入れて、彼を生き返らせたとの伝承は無視できない。おそらく額田部連久等々が特別に朝廷から派遣され、彼が大国主命（大穴持命）Ⅱ「出雲御蔭大神」を鎮圧できたのは、彼が神産巢日之命（神魂命）を祖神とする明日名門系額田部連出身であったためであろう。明日名門系額田部連の祖神である神産巢日之命（神魂命）が大国主命（大穴持命）を救ったとの伝承により、彼に白羽の矢が立ったと考えられる。事実、岡田山一号墳出土大刀銘の「額田部臣」をはじめとして額田部氏は出雲地域に濃厚に分布し、『出雲国風土記』には神魂命と大国主命（大穴持命）との関係を示す伝承が散見される。

『出雲国風土記』出雲郡宇賀郷条

宇賀郷 郡家正北一十七里廿五步。所造天下大神命、諱坐神魂命御子、綾門日女命。爾時、女神不肖、逃隠之時、大神伺求給所、是則郷也。故云宇賀。

『出雲国風土記』神門郡朝山条

朝山郷 郡家東南五里五十六步。神魂命御子、真玉著玉之邑日女命、坐之。爾時、所造天下大神、大穴持命、娶給而、毎朝通坐。故云朝山。

それらの伝承では、神魂命の子神が大国主命（大穴持命）と婚姻するという説話になっており、両者の良好な関係が確認される。また、『播磨国風土記』揖保郡鼓山条には、額田部連伊勢が神人腹太文と争ったとき、鼓を打ち鳴らしたので、鼓山の名があるとの地名起源伝承がある。神人腹太文は『新撰姓氏録』摂津国神別に「大国主命五世孫大田々根子命之

後也」とあるように大國主命の後裔と伝える氏族であり、神魂命と大國主命（大穴持命）との関係を重視すれば、額田部連伊勢も明日名門系額田部連であつた可能性が高い。

最後に額田部氏の系統別の職掌をまとめるならば、系統ごとに重複する部分もあるが、異なる特徴が指摘できる。まず、額田馬の伝承、飾馬など馬に関係した職掌は、天津彦根命系について指摘できるが、これは先述したように平群氏および平群氏系額田首との関係において形成されたことが想定される。湯坐の職掌についても、天津彦根命系の額田部湯坐連および額田部皇女（推古女帝）との関係から想定されるが、額田大中彦の伝承まで遡るものではなく、これも二次的職掌と考えられる。外交関係については、伝承上では百済や新羅との外交に活躍した千熊長彦が武蔵国の額田部槻本首の始祖と伝え、欽明朝に新羅掌客となつた額田部連の系統は不明だが、推古朝で新羅導者となつた額田部連比羅夫は天津彦根命系で、文武朝には平群氏系と推定される額田首人足が遣新羅使となつている。⁸² 律令については、大宝令編纂に関与した天津彦根命系の額田部連林、明経第二博士として平群氏系の額田首千足が見え、平安期の明法博士に春日氏系の額田国造今足があり、額田今人も同族と考えられる。⁸³ 仏教については、額田寺を建立し、孝徳朝に法頭を出した天津彦根命系の額田部連が優勢であり、本姓額田氏とされる道慈は系譜が不明だが、天津彦根命系でないとするれば、諸蕃系額田村主の可能性が高い。神事については、出雲大神を鎮座した明日名門系額田部連が優勢で、仏教で優勢な天津彦根命系とは好対照をなしている。明日名門系額田部連は歴史的に成立が古く、祭祀を担当する賀茂県主や三野県主と同族で、その神事は、田部の特殊な職掌（境界祭祀）であり額田部氏本来の職掌と考えられる。出雲岡田山一号墳出土の「額田部臣」の銘文が現在のところ最古の部名とされるのも偶然ではない。最後に技術については、天津彦根命系の額田部颯玉の名前から、その神事への供物として颯玉の製

造・献上に関係したと考えられる。ちなみに「出雲国造神賀詞」には、三輪山の神として「倭大物主櫛颯玉命」との表記があり、祖神の名前との関係が考えられる。一方、天津彦根命系については、額田部河田連の名前や、仁賢紀にみえる額田邑熟皮高麗との関係から馬の皮革に関する技術を有したと推定される。⁸⁵ 道慈についても、大安寺の平城京への移転において、全体を総括するとともに「構作形製」に優れた人物としても位置付けられている。この他にも、「正倉院文書」などには鑄工・瓦工・木工などの各種の技術者がみえる。⁸⁶ こうした系統別の職掌をまとめたものが表3である。おおむね明日名門系が主に神事を担当する以外は、天津彦根命系がすべての職掌にわたり優勢であり、他の系統の職掌とも重複するという傾向が指摘できる。

以上によれば、天武朝以前には職掌的に異なる天津彦根命系と明日名門系という二つの系統の額田部連氏が存在したことが確認される。このうち天津彦根命系の系統が推古朝には有力であつたこと、天武十三年に宿禰に改姓した額田部宿禰は明日名門命系であつたこと、などをさきに推定したが、そうすると推古朝から天武朝の間に両者の勢力交替が存在したことを想定しなければならない。⁸⁷ おそらく、それを示すのが、蘇我倉山石川麻呂の事件における天津彦根系の額田部湯坐連の失脚と考えられる。

『日本書紀』大化五年三月甲戌条

坐蘇我山田大臣、被戮者、……額田部湯坐連闕名。……凡十四人。
被絞者九人。被流者十五人

この事件に連座し、殺された者のなかに額田部湯坐連がみえている。この事件の処分は「戮」十四人、「絞」九人、「流」十五人という三段階で行われ、このうち最も重い「戮」のうち、名前を列挙された上位五人に「額田部湯坐連」が含まれている。おそらく天津彦根系の額田部湯坐連氏が大きな打撃を受けたことは容易に想像される。この事件により額

表3 系統別の職掌

	馬	湯坐	外交	律令	仏教	神事	技術
天津彦根系 湯坐連・額田部・河田連	◎	◎	◎	◎ 法頭	◎		△
平群氏系 額田首	◎		◎	◎			
明日名門系 額田部宿禰・應玉・額田部	△		△			◎ 出雲大神	△ 玉造
諸番（呉国）系 額田村主			△		◎ 道慈？		◎ 鋳造・瓦
春日氏系				◎ 額田国造			

田部氏の氏上としての地位はそれまで劣勢であった明日名門系に移り、天武朝において宿禰姓への改姓が認められたと考えられる。しかしながら、氏族としての潜在的基盤は天津彦根系が強かったらしく、以後も五位クラスの位階授与の記載などがみえる。

『統日本紀』文武四年六月甲午条

勅（中略）進大彥額田部連林（中略）等、撰定律令。賜祿各有差。

『統日本紀』天平勝宝六年閏十月庚戌条

外従五位下額田部湯坐連息長授從五位下。

『統日本後紀』承和七年正月甲辰条

詔授（中略）正六位上（中略）額田部湯坐連長良、並外従五位下。

このように、正史に叙位が記載されるのは天津彦根系のみであり、額田部宿禰に改姓した明日名門系は見えない。

こうした状況において、奈良時代中期には天津彦根系の額田部川田連を宿禰に改姓する動きがあった。

『統日本紀』天平宝字二年七月丙子条

正六位上額田部宿禰三当（中略）並外従五位下。三当本姓額田部川田連也。是日、以額田部宿禰姓、便書位記賜之。

額田部宿禰三当を外従五位下とする昇叙の記事だが、ただし本姓は額田部川田連との注記があり、叙位と同時に改氏姓がなされた結果、位記にその新姓が書かれたとある。熊谷公男氏の分析によれば、賜姓と叙位が同時であるのは例が少なく、請願を前提としない特授的な賜姓と考えられ、当該事例は彼の個人的な功績を褒賞したものとされる^⑧。一般的に改賜姓では詔勅が下されたのちに、太政官符により具体的な事務処理が民部省などに命令されたと考えられるが、この場合は改氏姓の詔勅を省略した簡便な方式で特殊であり、賜姓の形式としては限定的な条件が想定され、一族すべてではなく貴族となった本人一代限りのものであった可能性が高い。少なくとも朝臣・宿禰が多い貴族の氏姓として「複姓+連」は一般的でないための処置とも考えられる。天武朝以来、明日名門系額田部氏が独占してきた宿禰姓と氏上の地位を一代限りとはいえ、氏族としての実力は上位にあった天津彦根系の額田部川田連に与えられたことは、大きな変化であったと考えられる。

③『糸里図』作成の契機と年代

すでに指摘があるように、「額田寺伽藍並糸里図」にみえる「船墓額田部宿禰先祖」の注記はこの改姓と無関係ではないと考える。系統としては天津彦根系の額田部川田連に対して宿禰姓と貴族としての氏上（氏宗）的地位が新たに与えられたことにより、「令集解」喪葬令三位以上条に規定された「凡三位以上。及別祖氏宗。並得營墓」という規定に基づき、

別祖氏宗（分立した氏の始祖と氏上）としての墓が認定されることになった。これが絵図に描かれた「船墓」であり、額田部宿禰先祖という注記がなされる理由にもなった。絵図にはその他にも大小の墳墓が詳細に描かれているが、こうした記載は、『類聚三代格』慶雲三年三月十四日詔にみえる王公諸臣による山野占有を禁止した命令の例外規定として「氏々祖墓及百姓宅辺栽樹為林等。并周三十許歩不在禁限」とあることに関係し、「氏々祖墓」たる額田部丘陵周辺の古墳を詳細に描くことにより、寺領・所領認定の根拠とすることが大きな目的であったと考えられる。額田部丘陵の周辺に分布する大小の古墳を「氏々祖墓」として規定することにより、額田部丘陵全域の寺岡としての占有を合理化する目的が存在したと考えられる。絵図にみえる「石柱寺立」「石柱立」の表現は、丘陵部の占地を明示する手段であったと考えられる。氏上には氏や氏寺の財産を管理・運営する権限が与えられており、天武朝以来の系統のねじれを解消するため、天津彦根系額田部氏の本拠地たる額田寺の所領認定が絵図作成により図られたのであろう。福山敏男氏や狩野久氏の指摘によれば、絵図の成立年代は、「法花寺庄」の記載から、光明皇太后の一周忌に法華寺に対して「京南田十町」が施入された天平宝字五年（七六一）六月以降の作成と推定されている⁹¹。さらに、天平宝字年間に活躍した「中臣朝臣毛人」「巨勢朝臣古麻呂」の名前が絵図に見えるところから天平宝字年間またはそれに近い頃の作成とされている。額田部宿禰三当の改姓は天平宝字二年（七五八）七月であるから、直後に絵図が作成されたことは想定として矛盾がない。ちなみに、三当の改姓された天平宝字二年が造籍年、法華寺に京南田が施入された同五年（七六一）が班田年とされていることは偶然ではなく、天平宝字五年の班田が絵図作成の一つの契機として考えられる。

絵図の作成時期については、天平宝字年間よりもやや遅くなる可能性も残されているが、その最大の根拠となるのは金田章裕氏が指摘された

大和国における統一的条里呼称法の成立年代の問題がある⁹²。同氏によれば中世まで連続する条里呼称の出現は、宝龜三年（七二二）の校田の際に出現したとする。しかし、大和国での若干の施行ないし部分的な実施については否定されておらず、「第四額田里」のような表記は、天平宝字五年（七六一）と宝龜四年（七二三）の班田の中間に位置する神護景雲元年（七六七）の可能性も残ると考える。絵図作成の契機としては山口英男氏により孝謙（称徳）天皇による寺領施入が想定されているが、そうした契機を重視するならば、孝謙（称徳）朝における寺院行幸との関係が追求されなければならない（表4参照）。これによれば、天平勝宝元年（七四九）から宝龜元年（七七〇）まで、多くの寺院に行幸したことが確認されるが、行幸先の寺院に対して、施入などを行ったことが明記されるのは、神護景雲年間が多く、とりわけ班田年である神護景雲元年（七六七）に集中している。ちなみに、宝龜十一年（七八〇）勅録の『西大寺資財流記帳』にみえる官符図書のうち献入された年代を明記している土地施入文書や楽器や衣服の帳簿を集計してみると、行幸が行われた天平神護二年、神護景雲元年、同三年およびその翌年に集中している⁹³。おそらく行幸の際には正史に記載がなくとも、行幸先の寺院に土地施入などが行われたことが想定される。孝謙（称徳）朝における寺院行幸に額田寺への行幸を明記した記事はないが、近接する飽波宮への行幸が神護景雲元年と同三年に行われているのが注目される。

『続日本紀』神護景雲元年四月乙巳・丁未条

幸「飽波宮」。賜「法隆寺奴婢廿七人爵各有差」。

至「自」飽波宮。

『続日本紀』神護景雲三年十月己酉条

車駕幸「飽波宮」。

後者の行幸が、河内由義宮へ出かけることを目的として、経過したのみであるのに対して、前者の行幸は飽波宮での滞在が目的で、二日間ほ

表4 『続日本紀』にみえる孝謙・称徳朝の寺院行幸

年	行幸寺院
天平勝宝元 (749)	河内知識寺／東大寺／東大寺
2 (750)	薬師寺宮
3 (751)	東大寺
4 (752)	東大寺 開眼供養
6 (754)	東大寺
7 (755)	班田年
8 (756)	河内知識寺／知識・山下・大里・三宅・家原・鳥坂の六寺 河内知識寺
天平宝字5 (761)	薬師寺
6 (762)	法華寺
天平神護元 (765)	弓削寺
2 (766)	西大寺
神護景雲元 (767)	東大寺 (叙位)
	山階寺 (奏楽・奴婢賜爵)
	元興寺 (施入・奴婢賜爵)
	西大寺法院 (賜禄)
	大安寺 (叙位)
	薬師寺 (施入・工奴婢賜爵・賜姓)
	飽波宮 (法隆寺奴婢賜爵)
	寺院への献物叙位
	西大寺嶋院 (叙位)
	四天王寺家人奴婢への賜爵
	四天王寺への墾田施入
2 (768)	長谷寺
3 (769)	西大寺／飽波宮／龍華寺
	四天王寺・知識寺奴婢今良賜爵
宝亀 元 (770)	弓義寺 (叙位)

ど滞在し、近接する法隆寺の奴婢への叙爵が行われている。この叙位は上宮王家がかつて所有した隷属民に起源するもので、厩戸皇子ゆかりの飽波宮で叙爵されたことが重要と考えられる。額田寺も七世紀には法隆寺式の瓦が用いられ、熊凝精舎の伝承が残るなど、厩戸皇子との関係は浅からぬものがあり、おそらく天平宝字二年に改姓を許された額田部宿禰三当は、近隣の在地豪族として飽波宮に奉仕したことが想定され、もし天皇から額田寺への土地施入などがあつたとするならば、神護景雲元年における飽波宮行幸というこの機会が一番効果的であつたと推定される。

おわりに

同年は先に注目した班田年であり、この行幸の翌日に長門国の額田部氏同族が、銭と稲を献上して外従五位下と豊浦郡大領職を与えられているのも偶然ではないと考えられる。⁹⁶⁾

以上の検討によれば、額田寺の絵図が作成される年代と契機について、天平宝字二年における額田部宿禰三当の改姓および同五年の法華寺への京南田の施入あるいは、神護景雲元年の称徳天皇の飽波宮への行幸時の可能性を指摘し、いずれも造籍年や班田年に相当することを指摘した。

本稿では「額田寺伽藍並条里図」の作成年代および作成目的を子細に検討するための基礎作業として、平群郡の成立過程や氏族の分布の考察を前提に、額田部氏の系譜と職掌を分析した。その結論をまとめるならば次のようになる。

①大和国では、県や国造国からの立郡(評)または分割が一般的であつたが、例外的なのは忍海・広瀬・平群(飽波)の三郡である。三者に共通するのは、王宮を中心に独自の領域を構成している点である。奴婢や渡来系技術者の居住と密接な関係があり、有力豪族の拠点に対する倭王権の支配拠点・直轄地的な役割を果たしていた。

②平群郡の領域のうち後に額田・飽波郷となる地域は、独立した地域として評制下において複雑な変遷をする。大宝令以前には、人間集団の把握に対応して、後の額田郷域の北部は所布(または添上)評、東南部(大和川と佐保川および下つ道に挟まれた地域)は山辺評として把握されたと考えられる。さらに、額田邑の熟皮集団については、「宮郡狛人」の宮郡を飽波評に比定することが可能ならば、領域的には他評(山辺評)に属する人間集団を飛び地

的に支配していたことが想定される。

③天武朝以前には大和・河内を中心にした天津彦根命系と山城・摂津を中心にした明日名門系という二つの系統の額田部連氏が存在した。このうち天津彦根命系の系統が推古朝には有力であったが、孝徳朝の蘇我倉山田石川麻呂事件により天津彦根命系の額田部連は一時勢力を失い、天武十三年（六八四）に宿禰に改姓した額田部連は明日名門命系と推定される。

④額田寺の絵図が作成される年代と契機について、背景には額田部氏の二つの系統のねじれが背景にあり、これを解消した天平宝字二年（七五八）における額田部宿禰三当の改姓および同五年の法華寺への京南田の施入時あるいは、神護景雲元年（七六七）の称徳天皇の鮑波宮への行幸時の可能性があり、いずれも造籍年や班田年に相当することを指摘した。

鮑波評の規模や領域的行政区画の未熟性、従来あまり考察の視野に入らなかった明日名門系額田部氏の系譜や職掌などについて新たな見解を提示し、額田寺の絵図が作成される年代と契機について試案を示した。行論上、大胆な推測を重ねた部分も多いので、御批判を切に願いたい。

註

- (1) 『延喜式』民部上が「山辺 十市 高市」とするのに対して、『延喜式』神名上および『和名抄』は「高市、十市、山辺」とする。
- (2) 山尾幸久「県の史料について」（日本史論叢会編『論究日本古代史』学生社、一九七九年）は、「其於倭国六県被遣使者者、宣造戸籍、校田畝」（『日本書紀』）などの記載から、倭国六県が令制下の郡制に先行する人間集団の所属区分または行政区分とする。
- (3) 『日本書紀』綏靖紀二年正月条所引一書に「春日県主大日諸」とみえる。『角川日本地名大辞典』二一九 奈良県（角川書店、一九九〇年）、三〇五頁。
- (4) 『日本書紀』神武即位前紀戊午年六月丁巳条に「菟田下県」、同八月乙未条に

「菟田県」、「万葉集註釈」所引「伊勢国風土記」逸文に「宇陀下県」、延喜九年十一月十五日民安占子家地処分状（『平安遺文』二〇・二一・二二・二三号文書）に「上県」、「日本書紀」神武二年二月乙巳条に「猛田県主」などがある。

(5) 『日本書紀』欽明七年七月条に「倭国今来郡」、「坂上系図」所引「新撰姓氏録」逸文に「今来郡」を後に改めて「高市郡」と号したと伝える。

(6) 『日本書紀』神武二年二月乙巳条に「倭国造」「葛城国造」、同允恭二年二月己酉条に「開鶏国造」とある。

(7) 「古事記」応神段、「日本書紀」応神紀十九年十月戊戌条、「扶桑略記」同日条、「万葉集」巻一—三六番歌。

(8) 奈良県教育委員会「藤原宮」一九六九年、二二二号本簡。

(9) 黨弘道「国郡制成立史上の一問題」（『律令国家成立史の研究』吉川弘文館、一九八二年、初出一九五五年）によれば、『続日本紀』大宝元年四月丙午条に山代国葛野郡内に四神が鎮座するように書かれていることと、『延喜式』神名上の記載ではそのうち二神が隣郡に鎮座することとの差違に注目し、大宝以前の葛野評は山城盆地一帯を占める広大なものであったが、大宝令の施行により数郡に分割されたと推測された。

(10) 『木簡研究』三、一九八一年、一八・二〇頁。「弟国評については、これまで大宝令の施行に伴い葛野郡から乙訓郡の分割が行われたという説が有力であったが、再考の必要が生じた」との加藤優氏によるコメントが記されている。

(11) 黨弘道前掲註（9）論文の追考。

(12) 奈良県教育委員会「藤原宮」一九六九年、二二二号本簡。なお、『日本書紀』には評制段階およびそれ以前にも郡名は多くみえるが、「添上郡」（欽明元年二月条）、「添下郡」（天武五年四月辛丑条）などは、「所布評大野里」という木簡表記によれば、『日本書紀』編纂段階の明瞭な潤色となる。

(13) 鬼頭清明「律令国家と農民」塙書房、一九七九年、六六・六七頁。館野和己「律令制の成立と本簡」（『木簡研究』二〇、一九九八年）。

(14) なお、荒井秀規「相模国足柄評の上下分割をめぐって」（『市史研究あしがら』五、一九九三年）は、所布評の分割時期を「倭国添下郡」という『日本書紀』の記載を重視して天武五年以前に想定するが、天武後半期以降と推定される「大野里」の表記からすれば天武朝前半まで遡らせることには無理がある。

(15) 『木簡研究』三、一九八一年、一八頁。

(16) 『日本書紀』持統三年六月庚戌条、同四年九月乙亥条。山尾幸久「大化年間の国司・郡司」（『立命館文学』五三〇、一九九三年）は、庚寅年籍の評がすでに令制下の郡の規模と同じ内容であったとする。

(17) 大町健「律令制の国郡制の特質とその性格」（『日本古代の国家と在地官長制』校倉書房、一九八六年、初出一九七九年）、鐘江宏之「国」制の成立」（『笹山晴

生先生還暦記念会編『日本律令制論集』上、吉川弘文館、一九九三年。

- (18) 寛敏生「評と郡」(『続日本紀研究』二六八、一九九〇年)。たとえば、志摩国が成立時には志摩(嶋)郡一郡であったのは、上級の行政区画たる国を意識しない段階に、海人集団を組織して評制が施行された名残りであり、郡制施行直後の養老年間において二郡に分割されたのは、国と郡という異なる行政区画の重層性を重視した結果と考えられる。

- (19) 八木充「律令制民衆支配の成立過程」(岸俊男教授退官記念会『日本政治社会史研究』上、塙書房、一九八四年)。狩野久「律令国家の形成」(歴史学研究会・日本史研究会『講座日本歴史』一原始・古代一、東京大学出版会、一九八四年)。

- (20) 明白な地名の例とされることが多い伊場木簡の「柴江五十戸」(三号木簡)にも「柴江部」(六十一号)の存在が確認され、五十戸編成が旧部民集団から開始されたことは否定できず、少なくとも初期には評と五十戸編成との重層的関係は確認されない。また、関口裕子「大化改新」批判による律令制成立過程の再構成」(『日本史研究』一三三、一九七三年)は、庚午年籍段階では戸数が一定しない里が存在したとする。

- (21) 八木充「律令村落制の形成」(『律令国家成立過程の研究』塙書房、一九六八年)。
(22) 大山誠「古代駅制の構造とその変遷」(『史学雑誌』八五・四、一九七六年)、同「令制の駅戸数について」(『古代交通研究』四、一九九五年)。

- (23) 『日本書紀』天武十一年四月甲申条。

- (24) 『令集解』戸令定郡条所引古記に「若不足百戸者随宜隸他郡」とあることからすれば、法意として百戸二里以下の立郡は想定されていないことが確認される。

- (25) 原秀三郎「律令国家と地方豪族」(『日本古代国家史研究』東京大学出版会、一九八〇年、初出一九七六年)。

- (26) 園田香融「律令国郡政治の成立過程」(『日本古代財政史の研究』塙書房、一九八一年、初出一九七一年)、山尾幸久註(16)前掲論文は、国造制からではなくミヤケから郡への展開を主張する。井内誠司「国評制・国郡制支配の特質と倭王権・古代国家」(『歴史学研究』七・一六、一九九八年)も、ミヤケを媒介とする多様な地方制度の一元化の側面を強調する。国造以外にも、伴造・県稲置までもが評造に任命されたと伝えるのは、こうした評の本来的な属性である奉仕先の多様性を前提に考えるべきであろう。

- (27) 遠江国の淵評と駅評の大小関係からいえば、前者の内部に後者が包摂されていることが想定される。

- (28) 品部廃止の詔(『日本書紀』大化二年八月癸酉条)にみえる、品部を分かち、その名に別けたため、民と品部が「交雜使居国県」「二家五分六割」とい

う状況は、まさにこうした構造的矛盾を示している。

- (29) たとえば、三善清行「意見封事」(『本朝文粹』)所引「備中国風土記」逸文にみえる有名な遷居郷の伝承には、斉明朝の百済救援の際、当地で試みにこの郷の軍士を徴発したとの記載がある。もちろん数字に誇張は存在するが、律令制下の籍帳による予測可能な課丁徴発と、斉明朝の在地豪族に依拠した軍士の徴発形態との段階差を説話から読み取ることが可能であろう。

- (30) 『日本書紀』天智九年二月条。

- (31) 早川庄八「律令制の形成」(岩波講座『日本歴史』二 古代二、岩波書店、一九七五年)は庚午年籍を在地における既存の人民支配の秩序に依存して造られたとし、人為的な編戸である里制の存在には否定的である。また、鎌田元一「7世紀の日本列島」(岩波講座『日本通史』三 古代二、岩波書店、一九九四年)も里制にもとづく画一的・領域的編戸は困難であり、混在した人民の所属、所有者の別に従ってまとめられた可能性を指摘する。私見は山尾幸久註(16)前掲論文の説を支持し、改新詔の郡の等級は近江朝制定の単行法典の一条で、庚午年籍において編戸の基準となったと推定する。

- (32) 『日本書紀』神功五年三月己酉条、『坂上系図』所引「新撰姓氏録」逸文、『続日本紀』養老六年三月辛亥条、『元興寺縁起』、『肥前国風土記』三根郡漢部郷条など。

- (33) 小林敏男「忍海氏・忍海部とヲケ・オケ二王」(『古代王権と県・県主制の研究』吉川弘文館、一九九四年、初出一九八一年)、門脇禎二「葛城と古代国家」教育社、一九八四年。

- (34) 『続日本紀』養老六年三月辛亥条によれば、忍海部乎太須は忍海漢人ら合計七一戸の雑工とともに雑戸の姓を除かれたとある。

- (35) 吉田東伍『大日本地名辞書』上方編(富山房、増補版 一九六九年)、三三八頁。白石太一郎「古墳からみた古代豪族」(国立歴史民俗博物館編『考古資料と歴史学』一九九九年)、六四頁。ただし、『日本書紀』皇極元年是歳条にみえる「大和の忍の広瀬」は、忍海郡の曾我川を示すか。

- (36) 拙稿「斑鳩宮」の経済的基盤」(『古代王権と都城』吉川弘文館、一九九八年、初出一九八七年)、一〇九頁。

- (37) 天平勝宝二年二月二十四日官奴司解(『大日本古文書』編年三三三・三五九頁)。

- (38) 『日本書紀』天武四年四月癸未条に大忌神を広瀬の河曲に祭らせたとあり、以後天武紀には四月と七月に祭祀記事が散見する。

- (39) 広瀬郡については、平林章仁「敏達天皇系王統の広瀬郡進出について」(『日本書紀研究』十四、塙書房、一九八七年)、同「聖徳太子と敏達天皇後裔王族」(同十六、一九八七年)、同「古代の大和国広瀬郡と広瀬神社」(『龍谷史壇』九五、一九八九年)参照。

- (40) 『万葉集』卷十六—三八八五番歌。辰巳和弘「平群氏に関する基礎的考察」(『地域王権の古代学』白水社、一九九四年、初出一九七二年)。
- (41) 山尾幸久註(16) 前掲論文は、平群郡と同体の平群評の成立を、天武五年以後、庚寅年籍以前と推定されるが、私見では藤原宮出土木簡にみえる「所布評大野里」の記載を重視するならば、評の上下分割や、飽波評の平群評への併合など領域区画としての再編は次の段階となり、天武朝後半の里制施行よりもやや遅れ、里制が整備される庚寅年籍と大宝令の間と推定する。
- (42) 「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」(『続日本紀』神護景雲元年四月乙巳・丁未条、同三年十月己酉条)。
- (43) 天平勝宝二年二月二十四日官奴司解(『大日本古文書』編年三—三五九頁)。
- 『藤原宮木簡』一 解説 八四九号木簡。
- (44) 『坂上系図』所引「新撰姓氏録」逸文。
- (45) 狩野久「額田部連と飽波評」(『日本古代の国家と都城』東京大学出版会、一九九〇年、初出一九八四年)。狩野氏は「評の編成原理が郡のそれと必ずしも等置できない資料が確かめられた」と正しく飽波評を評価しながら、一方で大宝令郡制の最小単位である小郡Ⅱ郷程度の広さの確保Ⅱ地域的なまとまりを立評の第一の理由に挙げられる。このことは、評の成立要件を限りなく郡と等置させる結果となり、「原理的に二里でも構成できないことはない」と留保をしつつも「郡域としてのこすには狭隘でありすぎる」と結論づけられるように、評制から郡制への移行が必要とされた領域的な行政区画の未熟性の主張が広狭の議論に単純化されてしまった。むしろ「そこに住む人間集団の一定の自立性」という指摘を立評の理由としては重視すべきと考える。
- (46) 『新撰姓氏録』大和国諸蕃。『坂上系図』所引「新撰姓氏録」逸文。
- (47) 熊凝の語源については、『奈良県史』一四 地名(名著出版、一九八五年)、二四九頁による。黒田慶一「熊凝考」(高井悌三郎先生喜寿記念事業会編『歴史学と考古学』真陽社、一九八八年)によれば、『荒陵寺御手印縁起』にみえる摂津国における物部守屋からの没官所領のひとつである「熊凝地」は西成郡と東成郡の郡境にほぼ位置する。
- (48) 拙稿「斑鳩宮」の経済的基盤(『古代王権と都城』吉川弘文館、一九九八年、一一一—一二三頁)。
- (49) 『続日本紀』延暦四年五月丁酉条。
- (50) 浅井和春「法隆寺系幡と褥の銘文」(東京国立博物館編『法隆寺献納宝物 染織Ⅰ』便利堂、一九八六年)、東京国立博物館編『法隆寺献納宝物銘文集成』吉川弘文館、一九九九年。
- (51) 拙稿「斑鳩宮」の経営について(『古代王権と都城』、一六五頁)。
- (52) 『奈良県の地名』日本歴史地名大系三〇(平凡社、一九八一年)、角川『日本地名大辞典』二九 奈良県(角川書店、一九九〇年)、辰巳和弘「上宮王家と古代平群地域」(註(40) 前掲書)などを参照した。
- (53) 「法隆寺一切経」には写経の奥書に藤原・秦・中原・紀・六人部・伊水・矢田部・若原部・大神・藤井・源・日根・伴・中臣・春日・平・出雲・草賀・高橋・小野・守部・当麻・清原・磯陪・桑原・上毛野・夏見・安倍・大中原・百濟・物部・山城・錦織・橘・賀茂・水俣・宇治・舟宿彌・河内民首・美努・石主・坂合部・高是などの氏族名が見える(法隆寺昭和資料編編集委員会『法隆寺の至宝』七、小学館、一九九七年)。必ずしも平群郡内に居住したことが明記されているわけではなく(一部には「五百井村」「平群郷」「目安里」「坂門村弟原里」などの郡内の地名が明記される)、さらに奈良時代以前に遡ることが確実視される氏族ばかりではないが、物部氏系の居住を示す矢田部・物部、上宮王家との関係が深い秦・高橋・当麻・坂合部などの氏族名は注目される。なお、「法隆寺幡銘」や「法隆寺一切経」の奥書など法隆寺系の史料群に額田寺や平隆寺など独自の氏寺を有する額田部氏や平群氏の記載が見られないことは、法隆寺の信仰圏を考えるうえで重要であろう。
- (54) 米原永遠男「紀朝臣と紀伊国」(『和歌山地方史研究』九、一九八五年)、同「紀氏の展開過程」(『和歌山地方史研究』一一、一九八七年)、加藤謙吉「平群地方の地域的特性と藤ノ木古墳」(『大和王権と古代氏族』吉川弘文館、一九九一年、初出一九八九年)、辰巳和弘註(52) 前掲論文。なお、式内社「平群坐紀氏神社」が土地売券の条里記載から現生駒郡平群町椿井字垣内付近に比定されることについては、金田章裕「奈良・平安朝の村落形態について」(『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂、一九八五年、初出一九五四年)に指摘がある。
- (55) 『日本書紀』舒明即位前紀、「法王帝説」、「上宮記」逸文。
- (56) 狩野久註(45) 前掲論文。
- (57) 額田部氏についての関係論文を年代順に示すならば、太田亮「姓氏家系大辞典」(一九三四年、再刊一九六三年)、井上薫「道慈」(『日本古代の政治と宗教』吉川弘文館、一九六一年、初出一九四六年)、藤間生大「大和国家的構造」(『歴史学研究』二二四、一九五七年)、田中巽「額田部について」(『兵庫史学』二二、一九五九年)、田中巽「額田部の職掌について」(『神戸商船大学紀要(文科論集)』八、一九六〇年)、谷響「額田王」(早稲田大学出版部、一九六〇年)、橋本伊知朗「額田部宿禰先祖の墓について」(『日本上古史研究』四一五、一九六〇年)、山田弘通「額田部小考」(『国語教育』七、一九六一年)、落合重信「額田部とその性格」(『播磨風土記ノート』一)(『兵庫史学』三、一九六二年)、田中卓「大化前代の枚岡」(『日本国家の成立と諸氏族』国書刊行会、一九八六年、初出一九六七年)、谷響「額田姫王」(『紀伊国屋新書』一九六七年)、佐伯有清「馬の伝承と馬飼の成立」(『日本古代文化の探求』馬 社会思想社、一九七四年)、上井

- 輝代「額田部と湯坐と」(横田健一先生還暦記念『日本史論集』一九七六年)、前沢和之「古代の皮革」(『古代国家の形成と展開』吉川弘文館、一九七六年)、佐伯有清「新撰姓氏録の研究」考証編三・四(吉川弘文館、一九八二年)、狩野久註(45)前掲論文、岸俊男「額田部臣」と倭屯田(『日本古代文物の研究』塙書房、一九八八年、初出一九八五年)、本位田菊士「額田部連・額田部について」(『続日本紀研究』二三八、一九八五年、門脇禎二『日本海域の古代史』第八章(東京大学出版会、一九八六年)、鎌田元一「大王による国土の統一」(『日本の古代』六、中央公論社、一九八六年)、井上辰雄「額田部と大和王権」(鶴岡静雄編『古代王権と氏族』古代史論集二、名著出版、一九八八年)、黒田慶一註(47)前掲論文、前田晴人「額田部連の系譜と職掌と本拠地」(『日本歴史』五二〇、一九九一年)、加藤謙吉註(54)前掲論文、辰巳和弘「上宮王家と古代平群郡地域」(『地域王権の古代学』白水社、一九九四年)、武広亮平「額田部臣と部民制」(『古代王権と交流』七、名著出版、一九九五年)、森公章「額田部氏の研究」(本報告書所収)などがある。
- (58) 本位田菊士註(57)前掲論文。
- (59) 代表的な論考としては(A)太田亮「姓氏家系大辞典」、谷馨「額田王」、上井輝代「額田部と湯坐と」、本位田菊士「額田部連・額田部について」、(B)松岡静雄「新編日本古語辞典」(刀江書院、一九六三年)、田中翼「額田部について」、山田弘道「額田部小考」、(C)佐伯有清「新撰姓氏録の研究」考証編、狩野久「額田部連と飽波評」、岸俊男「額田部臣」と倭屯田、(D)落合重信「額田部とその性格」、その他の説として皇子養育のための部民「湯坐とする井上辰雄」「額田部と大和王権」、馬に関わる部とする前田晴人「額田部連の系譜と職掌と本拠地」などがある(出典は註(57)参照)。
- (60) 『国史大辞典』巻十一(吉川弘文館、一九九〇年)の「額田部」の項目(吉村武彦氏執筆)。
- (61) 『新撰姓氏録』左京神別下。
- (62) 本位田菊士註(57)前掲論文。
- (63) 本位田菊士註(57)前掲論文。ちなみに、「日本書紀」神功紀即位前紀に「尾田吾田節之淡郡所居神」とある志摩国の神は、「延喜式」神名上に「粟島坐神乎多乃御子神社」とも表記され、「神乎多」とは狭い水田＝神田の意で、伊雑宮の神田を守護する神と解される(『式内社調査報告』七、皇學館大学出版部、一九七七年)。小田部＝額田部本来の職掌として、こうした神田の管理や神事が職掌として想定される。
- (64) 『続日本紀』和銅六年五月甲子条に「畿内七道諸国郡郷名、着好字」とあり、この時の命令で「延喜式」民部上に「凡諸国郡内郡里等名、並用三字。必取嘉名」とあるような、字義のよい漢字二字による表記に統一されたが、郷里名表記の統一は神龜年間まで遅れたとされる。なお、国郡名の二文字が郷里名より早期に完了したのは(国名は大宝四年)、国印や郡印の使用において地名二字表記による統一が必要であったことと対応する。野村忠夫「律令的行政地名の確立過程」(『律令政治と官人制』吉川弘文館、一九九三年、初出一九七八年)、鎌田元一「律令制国名表記の成立」(門脇禎二編『日本古代国家の展開』上、思文閣出版、一九九五年)。
- (65) 田中卓「紀氏家牒」について(『田中卓著作集』二、国書刊行会、一九八六年)、同註(57)前掲論文。
- (66) 加藤謙吉註(57)前掲論文。
- (67) 『平安遺文』一一一九九号文書。
- (68) 八木充他「山口・長登銅山跡」(木簡学会『木簡研究』一九、一九九七年、一九三頁)。
- (69) 井上辰雄「日向隼人と大和王権」(『えとのす』三二、一九八六年)、同註(57)前掲論文。平群氏の外交伝承は『日本書紀』応神三年是歳条・十四年是歳条・十六年八月条、日向との関係は同景行十七年三月己酉条に児湯県で日本武尊が「平群山」を詠んでいること、などから推測される。
- (70) 『日本書紀』推古二十年正月丁亥条。
- (71) 三野県主系の額田部氏については前田晴人註(57)前掲論文が詳しい。額田部氏に複数の系統が存在したとの指摘は極めて重要であり、天武朝の宿禰賜姓が明日名門系であるとする想定は支持される。しかし、額田馬や湯坐の伝承が天津彦根系に限定されること、大和・河内では天津彦根系が有力であることなどからすれば、推古朝の額田部連比羅夫を明日名門系(三野県主系)の額田部連と断定する点には従えない。確実なのは天武朝以前に二つの系統の額田部連が存在し、そのうち天津彦根系が有力であったことだけである。
- (72) 『平安遺文』五一八〇一號文書。
- (73) 『鎌倉遺文』一三一九四九三號文書。
- (74) 『日本書紀』天武十三年十二月己卯条。日本古典文学大系『日本書紀』下(岩波書店、一九六五年)五九九頁補注など。
- (75) 前田晴人註(57)前掲論文。
- (76) 『日本書紀』推古即位前紀。
- (77) 敷田年治「風土記標注」。
- (78) 「古事記」垂仁段。『日本書紀』崇神六十年七月己酉条。
- (79) 「出雲国風土記」神門郡吉栗山条。加藤義成「出雲国風土記参究」。
- (80) 武広亮平「荒ぶる神」(『風土記の神と宗教的世界』おうふう、一九九七年)。
- (81) 『日本書紀』神功撰政四十七年四月条分註。なお額田部と槻本首とは別氏の可能性もある。

- (82) 『日本書紀』大宝三年十月癸未条。同和銅五年正月戊子条には額田首とある。
- (83) 『続日本紀』文武四年六月甲午条。同養老五年正月甲戌条。
- (84) 『令義解』附録など。『三代実録』貞観四年八月十七日癸丑条。
- (85) 前沢和之前掲註(57) 論文。
- (86) 鑄工として額田部乙麻呂(『大日本古文書』編年十六・三〇八・三二頁、瓦工として額田部乙麻呂(同編年四・一三七三頁、木工として額田部酒人(同編年四・五二五頁)などの名がみえる。
- (87) なお、『日本書紀』大化元年八月癸卯条にみえる額田部連甥の法頭任命は、神事や県主との関係が深い明日名門命系ではなく、額田寺の存在や外交使節との交渉から考えて天津彦根命系の可能性が高く、孝徳朝まではこの系統が有力であったらしい。
- (88) 熊谷公男「位記と「定姓」(『続日本紀研究』一八三、一九七六年)。具体的な功績は不明だが、あえて憶測するならば前年の橘奈良麻呂の乱に際して、賀茂角足が「額田部宅」で武官らを釘付けにする陰謀があり、これを密告した功績などが考えられる(前田晴人註(57) 前掲論文。
- (89) 前田晴人註(57) 前掲論文。
- (90) 狩野久註(45) 前掲論文、福山敏男「額田寺(額安寺)」(『奈良朝寺院の研究』綜芸舎、一九四八年)。
- (91) 絵図には、その他の寺領記載が「寺」とのみ表記するのに対して、「法花寺庄」との境を接する額田寺東南部の「門」の外側に位置する寺領記載は「額寺」「額田寺」と寺名を具体的に記している。おそらく、法華寺への「京南田十町」の施入に伴い、その境界を明示する需要が以後生じたものであろう。その点では「法花寺庄」の設定も絵図作成の大きな契機として考えられる(黒田日出男氏の教示による)。
- (92) 造籍年、班田年については今宮新「上代の土地制度」(至文堂、一九五七年)参照。なお、仲麻呂政権下の天平宝字五年の班田が、寺田の収公隠田の検出を厳格に行ったのに対して、道鏡政権下の神護景雲元年の班田は、寺領の回復拡張、貴族所有地の削減が行われている点も絵図作成の契機と考えられる。
- (93) 金田章裕「大和国額田寺伽藍並条里図」(『古代荘園図と景観』東京大学出版会、一九九八年)。
- (94) 山口英男「大和国額田寺伽藍並条里図」(『金田章裕他編『日本古代荘園図』東京大学出版会、一九九六年)。
- (95) 西大寺への行幸は『続日本紀』天平神護二年十一月癸巳条、同神護景雲元年三月壬子条・同九月己酉条、同三年四月辛酉条に記載がある。年代と施入件数を示すならば、天平神護二年(1)、同三年(1)、神護景雲元年(3)、同二年(4)、同三年(10)、宝龜元年(7)、宝龜年間(4)となる。
- (96) 『続日本紀』神護景雲元年四月戊申条。
- 〔補記〕
成稿後、難波宮跡北西部から「秦人凡国評」と記された木簡(二号)が出土した。『戊申年』(六四八年)という七世紀の紀年木簡(一号)とともに出土したことから成立期の評制を示すものと考えられる。少なくとも「凡国」の表記は律令制下の郡名にはみられないもので、本稿で論じた「飽波評」「賦評」と同じく、律令制下の郡に連続しないタイプの評として考えられる。『播磨国風土記』揖保郡条には漢人集団を持統朝の庚寅年籍の段階で里に再編成した記載があるように、秦人を人間集団と解し、依知秦公氏が居住した近江国愛智郡大郷などの郷レベルに比定できるとすれば、成立期において設定された渡来人集団を編成した一郷程度の評の類型として位置付けることが可能となる。また、国の領域を超えた例としては飛鳥池遺跡出土木簡の「加毛評柞原里人」の例があり(『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』十一、一九九三年、一三頁)、備後国司石川夫子の知安芸守事兼任(『続日本紀』天平四年九月乙巳条)などの事例から、隣接する安芸国賀茂郡と備後国御調郡柞原郷との関係が議論されている(西別府元日「飛鳥池遺跡出土「加毛評柞原里人」木簡について」『内海文化研究紀要』二七、一九九九年)。これは「飽波評」の周辺と同じく、地域権力の錯綜性が顕著であった事例とすることができるとする。さらに、小規模郡の再編消滅の事例としては、藤原宮出土木簡の「備前国珂磨郡他田里」の事例が(『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』十、一九九一年、八頁、備前国磐梨(赤坂)郡珂磨郷および山陽道珂磨郷との関連で議論されている(吉田晶「珂磨郡」木簡について)『吉備古代史の展開』塙書房、一九九五年、初出一九九一年)。木簡表記に里名が見えることからすれば、里制施行以降に国郡制に連続するような再編が行われたことが確認され、本文で想定したように、成立期の評は人間集団の把握と奉仕先の確定に主眼があり、後の郡のような行政区画としての均質性や国里との整合性は必ずしも保たれていなかったと考えられる。
- (国立歴史民俗博物館歴史研究部)
(一九九九年八月二六日 審査終了受理)

Genealogy and *Shokushou* of the Nukatabe Clan

NITO Atsushi

This paper discusses the formation of the Heguri county and the distribution of the elite clans. The study can be summarized into the following four points:

- (1) A county was normally formed from pre-existing *agata* and *kuninomiya-suko-no-kuni* (both are regional administrative units) in the Yamato region. However, three exceptions existed: Oshinumi, Hirose, and Heguri (Akunami) counties. Those counties were under the direct control of the Yamato authority. They possessed palaces linked to the Yamato authority in addition to the residence of *nuhi* and immigrants in their territories.
- (2) Within the Heguri county, the regions, which were to be called *Nukata* and *Akunami* in later days, underwent a complex administrative transformation. Before the *Taihou-ryo* legislation, the area north to the Nukatabe village was called *Sou-no-hyou*, while the southeastern land was called *Yamabe-no-hyou*. A leather-processing clan in Nukata area, specifically in the area of *Yamabe-no-hyou*, was called *miyakouri-no-komahito*. The study points out that the *miyakouri* can equate with the Akunami county, meaning that in fact the group of people who resided in *Yamabe-no-hyou* served to the Akunami palace and its county.
- (3) Before the Ten'mu reign, there were two unrelated Nukatabe clans; one was *Amatsu-hikone-no-mikoto* lineage in the Yamato and Kawachi regions, and the other was *Asukanado* lineage in Yamashiro and Settsu regions. The former *Amatsu-hikone-no-mikoto* lineage flourished during the Suiko reign but declined by the coup during the Koutoku reign. Later Ten'mu 13(A.D. 684), the men of the Nukatabe clan renamed themselves as Sukune, and they can be identified as *Asukanado* lineage.
- (4) Several incidents happened when the Nukata-dera map was in making: the renaming of the Nukatabe-sukune-mito at Tenpyou-houji 2(A.D. 758); the donation of rice-fields located south of Kyoto to the Hokke temple at Tenpyou-houji 5(A.D. 761); the Emperor Shoutoku's trip to the Akunami palace at Jingo-keiun 1(A.D. 767). Those events coincided with the years of census or rice-field distribution.